拒絶の血、光抜の速鬼

鏡狼　嵐星

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神、そして魔王はかつての対戦で命を落とした。しかし、その魂は、その力は死なない。その名が持つ暗示と概念はその世界に残り続ける。

ルシファーは傲慢を
レヴィアタンは嫉妬を
ベルゼブブは暴食を
アスモデウスは色欲を
ルキフグスは拒絶を

それを生み出した魔王や神の肉体は滅びようとも、その力は生き残り、新しい肉体を

求めた。怨念を持つかのように、それだけを求め、力の塊はついに体を見つけた。

この物語はその呪いのような巨大な力に憑りつかれた少年少女のお話である。

目次

顔見せ ―― 105

第零章　次世代のオリジン

隻翼と呼ばれる賞金首と悪魔を救う鬼 ―― 1

速の字を持つ少年と堕ちた天使の幼子 ―― 18

鬼の目覚めと雷の初恋 ―― 30

朱き少年と白き龍 ―― 43

聖剣計画と文字昇格試験 ―― 56

三文字に達したい者たちと進めぬ者 70

第一章　旧校舎のディアボロス

風紀委員会と変態三人組 ―― 91

第零章　次世代のオリジン

隻翼と呼ばれる賞金首と悪魔を救う鬼

いつからだ？　自分の無能さに歯を食いしばりたくなったのは。
いつからだ？　大切なものを守る力が欲しいと思ったのは。
いつからだ？　大切なものの為に命を、この身をささげようと思ったのは。
大切なものとはいつの間にか出来ているのに、無くなったら困るものだ。なのに自分には力がない。その大切なものを守るには力が必要だというのに。

力が欲しいのか？

僕には何もなかった。僕ができると言えば、頭でものを考えるぐらいだった。でも、圧倒的な森羅万象の力には知能だけではどうしても足りない。

お前は何を望む?

何か声が聞こえる。ついに天からのお迎えかな? 僕ももう死ぬのかな。……嫌だなぁ。まだやりたいことあったのに。

もう一度言う、お前は何を望む、少年?

……もし、許されるなら。もし、それが可能なら。僕に力をください。大切のものを壊させないために揮える、そんな力を。

欲するのは力。でも、それは守りたいが故、か。いいだろう、少年。その願い聞き届けたり。

「ヒャハハハハハッ!!　逃げろ逃げろぉ。いつまで逃げ切れるぅ？」
　どことも知れぬ深い深い森。その奥を走る小さな影が二つ。そしてそれを追いかけるでっぷりと太った男が一人。
「はぁっ……はぁっ、くそっ、なんで追いつかれるの!?」
　黒髪の少女がいらだっているように叫ぶ。その隣を小さな白髪の少女が息を切らして走る。そんな途中で木の根に足を引っ掛け、転んでしまう。
「だ、大丈夫かにゃ!?」
　すぐに体を起して、脚を確認する。紅く腫れており、到底使えるような状態ではない。
黒髪の少女は何の迷いもなく自らの服を噛みちぎると白髪の少女の脚に巻きつける。
「……ねぇっ、さまぁ……。私を、置いて……いって」

「そんなこと出来るわけないにゃ!!　無理でも二人で逃げ切ってやるのっ」
白髪の少女を背負い、走る、走る、走る。しかし、無情にももう一つの足音が消えることはない。どんどんと大きくなる。その緊張感と張り巡らせてきた気が薄くなっていくのを自分でも感じている。でも負けられない。自分はだめでもせめて、妹だけ……。
「はい、追いついたよォォォ?」
その前を太った男に遮られる。その手にあった鞭がしなり、顔を的確に打ち付ける。脳を揺さぶられる感覚。思わず立っていられなくなり、座り込んでしまう。
「ヒャハッ、鬼ごっこは終わりさァァァ。おとなしく家に帰るよォォォ。黒歌ァァァ?」
自分の妹である白髪の少女に覆いかぶさるようにその手を遮る。絶望をかみしめ、その手が触れた瞬間にかみついてやると、身構えるが。
(…………?)
いつまでたってもそれが来ない。不思議に思って、振り返ってみると。
「ぱぁ……、ぷひゅ」
腹に何者かの手を生やしたその男がいた。その男は間抜けな顔から一気に憤怒の形相に変わる。手に持っていた鞭を後ろに振りまわし、自分の腹を貫いた相手を狙うが、

「……ッ」
　それを察知した相手がいとも簡単にその鞭を避けながら、手を引っこ抜く。その男は手で腹にあいた穴を押さえながら叫ぶ。
「いったああああい⁉　どおおこの誰だああ⁉⁉　俺はミュルヌルン家長男のディブタンテン様だぞオオ⁉」
　背後に跳びのいたのは、黒髪の少女と同じくらいの小柄な人物。肌を見せないように黒い布が巻かれている上に、奇妙なお面をかぶっていて何者か判断ができない。
【聞いたことがないような家柄だね】
　ノイズがかかったような聞き取りにくい声。仮面の右側に笑いを、左側に悲しそうな顔が首をかしげるのに合わせて横にずれる。
【さて、早いうちに君の血をいただこうかな】
　普通の人間なら即死するレベルのはずの怪我。それなのにその男が生きているのは人間ではないからだ。
【貴族悪魔、下級とはいえ純血なのには期待するよ？】
　彼が左手を男に向け、手招きするように手を動かすと男の腹の血がそれに従うように、彼の手の上に集まり始める。その速度は徐々に速くなりだし、男の顔に焦りが見え始める。

「な、何をするのかぁぁぁぁ!!　やめろおおおお!!」
　男の掌に魔方陣が浮かび、それに呼応するようにいくつもの弾が彼を襲う。巨大に土煙が同時に上がる。
「ヒャハ。俺に手を出すからだぁぁぁ。ヒャハ、ヒャハハハッハ、ハヒュッ!?」
　笑っていたその男へ向け、一つの紅き塊が弾丸ほどの速さで、野球ボールほどの大きさで顔面にめり込む。わずかに跳んだその男はさらに飛んできたその塊たちに抵抗できずにさらに後ろへ吹き飛ばされる。
【めんどくさいなぁ。あまり肉体には興味ないから食べていいよ】
　相手に向けた左手が肩まで紅く染まり、それがまるで生き物のように男の方へ飛んでいく。紅かったはずの血は一部だけが黒く染まり、男の上に覆いかぶさり、すっぽりと包まれてしまう。
「な、なんだこれ、ぎゃぁ、い、いあたったい、や、やめ、あぁぁぁぁぁあぁぁ………」
　スライムが動くみたいに上下し、声がどんどんと消えていく。そして、何も聞こえなくなった後に、人の大きさほどもある巨大な血の塊がゆっくりと近づいてくる。
【さて、行こうかな】
　踵を返して、去ろうとする相手に対し、
「ま、待ってほしいにゃ!!」

　黒髪の少女は震えている白髪の少女を抱えながら、
「あ、ありがとう。助けてわけじゃないにゃろうけど……、お礼は言っておくわ」
【……自分のことはよくわかってるんだね。自分たちが狙われないわけじゃないことを、ね】
　彼は振り返り、着ているコートの中から一つの小瓶を出して、黒髪の少女に渡す。
【それを飲めば、しばらく痛みもなくなるだろうさ。さすがに、自由を手に入れた君たちを殺すほど血には飢えてないよ。隣にいっぱいあるからね】
　空中にわずかに浮き上がる彼を見上げた、二人の少女は眼を見開く。それは、悪魔に、いや翼を持つ種族にとって命である翼が
【君たちとはまた会えるような気がするよ。じゃあ、また。猫又ちゃん】
　少女たちから見て、左側。つまり彼には右側にしか翼がない。隻翼はハーフであれば、可能性はある。が、後ろを向いたときにわずかに根元だけ残っている翼があった。
それはつまり、切り落とされたということだ。
　しかし、〝優雅〟。どんなに高貴な悪魔にも出せないような、尊さがあった。月に重なるように血の太陽と共に消えていく。
「綺麗……」
「……うん、そうだね、白音」

ここは冥界の中心近い場所に存在するグレモリー領。とてつもないほどの大きさを誇る現魔王の土地である。その中で魔王とその家系が住んでいるお屋敷があるのだが、そのうちの一つの部屋の机に肘を突きながら一枚の紙を持っている。

「どうされたのですか、サーゼクス様」

一人のメイドが傍に紅茶を置きながら、紅き悪魔に質問を投げかける。彼は、紅茶を口に含み、見つめていた書類を彼女へと見せる。

「また、彼だそうだ。今回も貴族の一人がやられたみたいだよ」

彼女はその書類に目を通す。

調査隊から冥界治安維持会へ。

今回も識別名『隻翼』を確認。監視を続けたところ、ミュルヌルン家長男のディブタンテン様と接触。そのまま戦闘へはいりました。

やはり、『隻翼』の力は強大であることが再確認。観察結果より、血液の性質を変化させる能力が確認。このまま監視を続行いたします。

追加として、『隻翼』は自らの肉体の血液を使い魔のごとく使用可能なことも確認。貴族悪魔に対して圧倒的であり、反撃もさせませんでした。なにより、魔方陣を展開させていなかったというのが強みかと思われます。これにより、『隻翼』の危険度をA級からS級へと上昇させることを推奨。

ディブタンテン様は骨すら残っていないことが判明。危険度の上昇率の証拠として提示いたします。

「血を使役する、ですか。魔方陣なしに」

彼の妻にして、最強の女王（クイーン）であるグレイフィアも眉をひそめた。

「僕たち悪魔、他の勢力にとっても魔方陣とは最も底辺にある基盤にして基礎。それを展開しないということは、彼は魔力だけでその血を使役しているということだ。魔法を

使用せずにね」

彼らの実力でも魔方陣なしに出来ることは、魔力を直接ぶつけるなどの単調な攻撃ばかり。それは『隻翼』の実力がとんでもないことを表している。

「でも、彼が殺しているのは下種な方とはいえ貴族悪魔。ランクを上げざるを得ないね」

『隻翼』が殺した人物は例外なく、奴隷をひどく扱っていたことや自分の利益の為だけに犯罪を起こそうとするなどのねじ曲がった人物だけなのだ。裏の事情からすると、いなくなっては困る人物ではあるのだ。

「……何故、彼は何も言わないんだろうね。いや、言っても無駄なことを知っているのかな」

「おそらくそうだと思いますよ。とても頭の良い人物だと聞きますから」

悪魔の駒（イーヴィルピース）の制度を導入してからというものの、無理やり眷族にするという事件を何度も聞いている。この二人は彼がその被害者であると考えている。

「……ふぅ、心の底からゆっくりできるようになるのは本当にいつなんだろうね」

魔王の一対の言葉を聞いたのはその最愛の妻（クイーン）だけである。

「失礼ですが、ご報告があります」

そんなところに入って来たのは彼の騎士（ナイト）であり、日本で知らない者はいないであろう新撰組一番隊隊長沖田総司。

「何かな？」

「妖焔山の千秋様から至急来るように連絡が」

　悪魔、天使、堕天使に続くもう一つの勢力である妖怪。まだサーゼクスが魔王につい
て間もないころに、二人の人物がバラバラだった妖怪たちを数年という時間でまとめあ
げ、三大勢力に匹敵する軍事と組織力を持つようになった一団。その現在のトップが猿
飛千秋である。

「わかった、すぐに行こう」

　妖焔山は基本中立で、どの勢力からも独立している。時には悪魔に協力し、時には堕
天使を助ける。依頼として扱われれば、それをどんな人物であれ、受けるのが大四勢力
の妖怪である。そのため妖焔山のトップである彼女は世界の中でも顔の広さは一二を
争うほどなのだ。その彼女からの逆に来るようにと言われれば、恩を売っているサーゼ
クスは行かざるを得ない。

「すでに準備は出来ています。どうぞ」

　沖田が一枚の紙を彼に渡す。受け取った彼は移動用の魔方陣を展開し、妖焔山へと向
かう。魔方陣をくぐれば、そこはすでに妖焔山の土地であり、客間の一室だ。

「きましたか、サーゼクスさん」

「君から呼ばれるなんていったい何事だい？」

額に一本の角がある少女。この妖焔山の中で一番強い人物、猿飛千秋その人である。
彼女は少し困っているというか、戸惑っているというような顔をしていた。サーゼクスとグレイフィアは普段冷静な彼女らしくないと顔を見合わせる。
「いえ、実を言うと……」
理由を話してくれようとしたその瞬間、
「ソーたぁぁぁぁぁあああああん!!!!」
青色の魔方陣が出現したかと思うと、黒髪でツインテールの千秋と変わらないぐらいの身長の少女が飛び出してきて、千秋の襟をつかんで上下に振る。
「千秋ちゃん!!　ソーたんは、私のソーたんはぁぁ!?!?」
「お、お、おちついて、セラフォルー!?　奥の客間にいるから、ってきゃっ!?」
きくやいなや、「ソーたああん!!」と叫びながら、廊下に出て走って行ってしまった。
「そっちは逆だよ!?　……聞いてないか、はぁ」
「……そろそろ説明してもらっていいかしら、千秋?」
仕事口調を崩し話すグレイフィアに、千秋ははっとして経緯を反した。簡単に説明すると、冥界に修行に出ていた千秋の息子が怪我をしたソーナ・シトリーを背負ってきたというのだ。
「なるほど、セラフォルーが取り乱すわけだね」

「あの子ならすぐ来るだろうから、先に案内するからついてきて」
　奥にあるいていき、ある一室の襖を開く。その中にいたのは黒い髪で一本の角を額に持つ少年が、嗚咽を漏らしながら彼に抱きついている見覚えのある少女、ソーナ・シトリーの頭をなでている光景があった。
「ひぐっ……ぐずっ、あぐっ……」
「早く落ち着けよ。何分泣いてるんだよ、お前」
　その少年はとってもうっとおしそうだが、その手を止めようとはしない。
「あ、母様。来ましたか？」
　少年は千秋の隣にいる二人に対し、視線をわずかに向けると元あった戻す。
「ほら、あんたの知り合いが来たぞ。いい加減泣き止め」
「ぅう……、お姉ぇ……ちゃん……？」
　ソーナが顔をおあげたその瞬間に、一人の影が飛び込んできて、少年からソーナを奪い取る。
「ソーたあああああん!!　心配したんだよぉおおお!!」
　その小さな体格に対しては大きめの胸に顔をうずめられ、手をパタパタと振る。少年は奪われたことに何も言わず、立ち上がって外へ出ようとふすまを通ろうとする。
「すまないね。セラフォルーの代わりにお礼を言うよ」

「別に。獲物を追っていたらそいつを拾っただけだ。お礼を言われる筋合いはねえよ」
　わずかに体を浮かせたその刹那、彼の体が消える。魔王の一人であるサーゼクスですら消えた瞬間を見ることができなかった。
「……すごいね。外見からすると相当若いはずなのに」
「私の自慢の子の一人だから。あなたの妹と一緒ですよ？」
　やっと、セラフォルーとソーナともに落ち着いたのか、普通に話せるような状態となった。
「ご、ごめんなさい。ご迷惑をおかけしました」
　まだ涙が止まらないのか、詰まりながらもお礼を言った。サーゼクスは少しづつでもいいからなんでこうなったかを説明するように言った。ソーナは、つまりつまりになりながらも、話し始めた。
「最近、お姉さまは忙しくて私と遊んでくれなかったから、一人で外で遊んでました。それで、秘密で外に出て、森の中に入っちゃって、そこで」
「魔獣に襲われたってことか」
　少年の言い分からして、その魔獣を追っていたのがあの荘園なのだろう。
「そうだ、千秋。彼の名前を聞いていなかったね。改めてお礼を兼ねて会いに行きたいんだが」

「あ、言っていませんでしたね。あの子の名前は……」

妖焔山の中腹あたりに存在する、木がない開けた広場。そこに一陣の風と共に黒い角を額にはやした少年が虚空から現れる。
「悪い、少し遅れた」
「ふふふ、君が遅れてくるなんて珍しいね」
広場の真ん中に座っていた隻翼の少年。その肩にはいく羽かの鳥が乗っている。
「いろいろあったんだよ、グラン」
「まぁ、君が遅れることなんてそんなことぐらいしかないでしょ、日向雅」
グランと呼ばれた湘南絵は立ち上がり、日向雅に向き直る。
「遅れはしたが、とっとやるか」
日向雅は背中から普通の金棒よりも細く、少しでも力があれば触れそうだ。それを両手で顔のあたりで持ち、体の半分を後ろに下げる。

「そうだね。時間はある。思いっきりやろうか」

グランの手首から血が出てきたかと思うと片手で振るには少し大きめの斧を空中に浮かせ、自分は血を体に道のように走らせる。

「また、新しい戦い方か？」

「君と違って、僕は戦い方は一つに統一しないほうがいいからね。まぁ、楽しみにしててよ」

血を浮かせる隻翼の少年と細い金棒を俊足の速さで振る少年が激突するまであと数秒もなかった。

速の字を持つ少年と堕ちた天使の幼子

暗い夜に光り輝く街並みが目立つ。ネオンライトがうっとおしいぐらいに強く光るので町の中にいなくてもその町がしっかりと見える。そんな街の隣にある山のてっぺんにある木の上に一人の少年が立っている。腰には細く刀のような金棒。まだ少年といってもいいほど外見は幼い。しかし、その眼光は鋭く、子供のようには感じない。

「この辺りは大丈夫か」

そう呟きながら町を見下ろす。彼の手には数枚の町の地図があり、そのうちの一枚はこの街を指しているようだった。

「最後はここか……」

一番後ろにあった地図を引っ張り出し、広げる。その地図の右上には『駒王町』と書かれていた。

「隣町まで二十キロほどか。なら一分と少しで着くな」

木の頂上から身を躍らせたその瞬間にその姿が掻き消え、わずかに風が巻き起こる。その風はわずかに渦巻き消えた。

日向雅がこうやって街を回っているのは観光のためでも、遊んであるわけでもない。

彼にとって一番ともいえる理由、妖焔山のためである。妖怪たちの集まりである妖焔山がなぜこんなことをするのか、それは悪魔や堕天使などと妖怪の根本的な違いにある。
悪魔や堕天使は人間と同じように子をなして繁殖する。それに対して妖怪は生殖ができるようになるには、そういった専門の妖怪でない限りは人型にならないとできないということ、そして弱い妖怪たちはあらゆる種族の恐怖から生まれる存在であることがある。端的に言えば、妖怪は恐怖という感情さえあれば、生まれることができる。人型になるにはある程度の実力が必要となるが、それを除けば、妖怪はどこからともなく生まれるので他の種族のようにまとまる必要がないのだ。
ただし、そうであるがゆえに純血が減っている悪魔などとは違う問題が生じる。それはその妖怪に対しての恐怖心が消えると死んしまうという、強者や有名な妖怪でないとすぐに直面する問題があった。これらのことがあり、最初はだれも組もうとはしなかった。そこへ現れたのが、柴死雲外鏡と紅黒零狼王の二人である。彼らは強力な妖怪たちをとてつもない速さでまとめ上げ、神の信仰に付属したあるシステムを作り出した。
それは様々な地域に存在する土地神の信仰を使い、弱い妖怪たちの恐怖へと変換するというものだった。もちろん土地神を様々な敵対勢力から守り、人に信仰させる手伝いをすることが条件だが、このシステムを作った時からこの組織は圧倒的な速度でその勢力を伸ばしていったのだ。もともと神に対する信仰心は『畏れ』であり、妖怪に対する

恐怖心は『懼れ』であるため、本質的には同じなのだ。よって、弱い妖怪の名を知らしめることはできなくても、神から力を分けて与えることはできると考えた結果であった。

土地神は祠の数だけあるといってもおかしくないほどいるので、それを管理するのに日向雅の能力、いや魔法はとても有能なのである。

「ここにある神社は十二か……。早く終わらせてしまおう」

町の端にある古びた神社に降り立つ。すっかりさびれてしまっているが、奥の社から光は耐えていないところを見ると、この場所の神は消滅していないことになる。

「おや、日向雅くんか。毎回悪いねぇ」

そこから扉をすり抜けるように出てきたのは初老の男性。白い着物を着ているという点以外は普通にそこらにいる人と何も変わらなさそうではあったが、不思議と敬いたくなる感じがした。

「これも仕事なんで」

「君はまだ小学生なんだろう？　しっかりすすぎてて、心配しちゃうくらいなんだから」

苦笑いされてしまったことが不満なのか、少し表情をゆがませる。しかし、苦笑いから一転、険しい表情になったのを見て、何かあったのかと聞いた。

「嫌な予感がする。僕の神力の力は予知。この街で何か大変なことが起きそうだ、人が

呪い殺されるような嫌な」
　下を向いていた男性が顔をあげると、すでに日向雅はいなくなっていた。いや、その瞬間風が起こったので、それを探しに行ったことが分かった。
「はぁ、無茶するよ。一応妖焔山に連絡を入れておこう」

　町の中にある建物の屋上を飛び回り、それらしき人影を探す。普通なら見落とす類のスピードだが、日向自身はそのスピードでも周りを確認できているので問題はなかった。
「町中じゃない……!?」
　てっきり街中でそういう行為に及ぶものだと思っていた日向雅は拍子抜けを食らった。町を探したが見つからない、つまり家の中かそれこそ町の外で会いかあり得ないと思ったそのとき、
「!!　まさか」

その考えが間違っていることを祈りながら町のはずれにあり、この街で唯一巫女のいる神社へと向かった。神社に上がるための会談の入り口にたどり着いた時には、すでに何者かが戦闘を行っているような音が響き、人払いの結界が張られていた。
「くそっ!!」
呪い殺すならば、よほどのことがない限りは一般人は殺さない。それこそ、特殊な力を使うようなものに対して使うのが呪いだ。そうたとえば、巫女のように。
一気に階段を駆け上がって上にたどり着くと、五名ほどの男が怯えた表情をした子供を抱えている女性が一人で戦っていた。その女性が巫女らしき格好をしていたことにより、自分の考えが正しいことを知った。
『風貫　群青』ッ！」
自分に青い魔力がまとわれる感覚とともに自分の速度が上がる感触を感じながら、女性に切りかかろうとした一人の男に腰に下げていた金棒を叩きつける。男たちも巫女も抱えられている少女並みに押さない少年が戦いに介入してきたことに驚く。
「貴様っ、何者だ!?　見たところただのガキか?　早くここから去れ、さもなくば、お前も殺すぞ?」
「何をしてるの、あなた!?　逃げなさい!!」
立ち位置から前後から声が降りかかる位置にいる日向雅は気怠そうに息を吐き、声を

張り上げた。

「俺は妖焔山の妖怪の一人、杵槌　日向雅であるッ!!　俺からも問おう、妖焔山の管理下にある神社、その重要な役割を持つ巫女にお前らは何をしようとしていた？」

『妖焔山』というワードを着た瞬間、少女以外は顔を少しゆがめたが、すぐに男どもは表情を戻す。

「われらはそこにいる堕ちた天使の忌み子を殺すためにここにいるのだ、そこの巫女に用はない」

リーダー格と思われる鋭い眼光をした男がにらみを利かす。しかし、その程度に屈しはしない。

「ならば、なおお前らの罪は深い。次代の巫女を殺そうとしたことには変わりないからな」

金棒を両手で持ち、腕を上げ、顔の横まで持ってくる。戦闘態勢に入ったことを察した男たちはそれぞれの獲物を構えた。それぞれかまがまがし魔力を感じるため、されらすべてが妖等に近いものだと分かった。

「子供だからと言って加減はせぬぞ」

「上等だ」

「あ、あなた何を戦おうとして、キャッ!?」

リーダー格の男に反論をした刹那、速度を一気に最高速にあげ、突っ込む。子供ゆえの身軽さを利用し、あらゆる角度から死角を狙う。

「ぬ、なかなかに早いな。だが、攻撃が軽すぎるぞ、糞餓鬼」

すべて剣で流される。日向雅自身も攻撃がそんなに軽く通用すると思ってもいないし、これで倒せるなんて思うほど自惚れてもいない。最初の基本的な方から徐々に体の無駄な動きを排除していき、速度を変化させ、最初の時点とわずかにラグを生じさせる。

それにより、

「うぐっ!?」

隙が増え始める。初撃は掠る程度ものだったが、傷であるのは確かであった。しかし、一人に集中しすぎていた日向雅は周りにへの配慮が分散していた。リーダー格の男からの攻撃でできた視界の隅に見えた、少女の後ろから切りかかろうとしていたこの場にはいなかった男の存在に初めて気づいた。それに巫女も気づいたのか少女の上に覆いかぶさる。そこへ向かおうとするが、攻撃に隙を見つけられず、無理やりはじいて向かおうとするが、

「甘いわ!!」

金棒を持っている腕に一撃をもらい、肉が裂けた感覚がした。だが、その痛みも無視し、速度を上げ、切りかかろうとしていた男の体に体当たりするが、一歩遅く、すでに

わずかではあるが背中を切られていた。

「チッ」

彼く舌打ちをしながら、切りかかろうとしていた男の溝に一発入れて気絶させ、残りの男たちに金棒を向ける。

「やけに張り切るな。お前が受けたのは『二斬必殺』と呼ばれる呪いだ。これはな、一回切っただけでもしっかりとした呪いとして働くが、二回きられると必ず死ぬ呪いを持っている。その腕では戦えまい。獲物を捨ててこちらへ来い、楽にしてやる」

後ろで苦しむ巫女の声が少しの間響く。

「誰が、投降などするか。そうならば、もう一度触れずにお前を殺せばいい」

金棒を地面に突き刺し、服の一部をかみちぎり、聞き手に巻き付けながら背中に回し、体にくっつけるようにして固定する。左手でもう一度金棒をつかみ、構えなおす。

「も、もうやめてぇ」

巫女の下にいる少女から消え入りそうな声が聞こえる。だが、日向雅は純粋に問うた。

「ここでやめてどうなる？　どっちにしろ死ぬのが変わらないなら、惨めでも、滑稽でも、戦って死んだほうが何もしないよりもましだ」

少女が黙り込んだのと同時にリーダー格の男が笑い出す。

「ふふふ、お前も戦士か、そうなのか。先ほどは無礼だったな、杵槌　日向雅よ。お前ら、手出しはするな！　こいつは俺が全力をもって殺す」
　両手で剣を持ち、しっかりと相手を見据えるその様子はまさに殺しがそこにあるようだった。
「姫島家『裏』筆頭。すまんが名は言えぬ、荊とでも呼んでくれ」
「妖焔山所属、二つ名は『速』、杵槌　日向雅」
「……お前、その外見で文字持ちか、なるほど納得だ」
　妖焔山はある程度の実力を持ち、仕事である程度の成績を出せば、二つ名として漢字が与えられる。その漢字の数が多ければ多いほど実力が高いとされる。
　先に飛び出したのは日向雅。左手というハンデがないと思えるほどの的確さで荊を狙う。しかし、荊もそれをいなしながら、攻撃を続ける。それが数分の間にわたって続けられたそのとき、真上から落雷が降り注いだ。
「大丈夫かぁっ⁉　朱璃ぃ、朱乃ぉ‼」
　雷とともに現れたのは必死の形相のこわもての男性。だが、背中に何枚かの黒い翼があるため、堕天使だと思われた。
「うぬ？　あれはバラキエルか。今回の暗殺は失敗ということだな。撤退だ撤退」
　襲撃者たちは各々が脱出をしていく。堕天使のバラキエルと呼ばれた男はそんなこ

とを気にしていない。

「朱璃!?　大丈夫かっ!!」

「あなた、私は、大丈夫。だから、あの、子を……」

巫女に駆け寄った堕天使がこちらを向いたのをわずかに、意識が暗くなって切れた。

倒れかけた少年を受け止める。第一に思ったのは、

「軽い……」

状況を見る限り、戦うことができない朱璃と朱乃を守ったのは彼だろう。だが、そんな彼の体は外見相応、いやそれよりも軽い気がした。

「おとうさん、その子、お母さんと同じで剣にズバッてされちゃったの!!」

朱乃が心配そうに見上げてくる。朱璃の実家である姫島家の刀ならそれは非常にまずい。

「分かった!　今すぐ、アザゼルのところへ……!!」

朱璃とこの子の呪いを治せるとして一番早くついてかつ可能性が一番可能性が高いのはあいつだ。今すぐにでもと思ったその時だった。

「ああ、その必要はねぇよ」

突如として聞こえた第三者の声。後ろを振り返ると、きれいな柴銀色の髪をなびかせた悪魔のような翼をもつ青年だった。
「あなたは……？」
「今はそんなことどうでもいいだろ。その奥の巫女、とっと連れてこい」
支持されるがままに朱璃を連れてきて、少年のそばへ並べた。なぜか信頼できてしまった、名も知らぬこの青年を。
「『両像変形（アビス）』」
空中に突如鏡が現れたかと思うと、二人の顔色がよくなり、傷がふさがっているように見えた。
「この二人は絶対安静だ。んで、そこの小さいの。お前巫女見習いだろうが、回復魔法の

初期でも何でもいいから顔色が少しでも変わったらかけてやれ」
　そういうと、踵を返し、神社から去ろうとする。
「待ってください!!　あなたの名前は?」
「んあ?　しがない柴死雲外鏡だ」
　後ろ向きのまま手を振り、もう一度目を開いた時にはもういなかった。
「柴死雲外鏡……?　まさか、そんな」
「おとうさん!　早く家に運んで!!」
「お、おう、わかったよ、朱乃」
　いろいろ疑問が残ったが、ひとまずはこの二人だ!

鬼の目覚めと雷の初恋

真っ黒な景色が少しずつ明るくなるような感覚。そのまぶしさから少しだけ目を開いて、見えるものを確認する。
「知らない天井だ……」
見たことがない和室風の一室。体を起こそうとして、右半身の謎の痛みによって、起きることができずに布団の上に戻る。気絶する前の記憶をたどり、右腕に呪刀の一撃を食らったことを思い出す。その右腕の感覚はわずかにしか感じられず、動きもぎこちないものだった。その確認をしている途中にふすまが開き、誰かが入ってくる。
「起きたのか？」
「……アザゼルか」
「呼び捨てにすんなよなぁ……もう慣れたがよ」
少し不満そうな顔だったが、隣に座り、彼の右腕を持ち、眺める。俺が苦い顔をしているのも無視している。
「お前なぁ、姫島家は五大宗家なんだぞ？　しかも呪いに対しては頭一つ抜けてるんだよ。それをこんな荒療治でかたずけんな、バカ」

頭に手を置かれてわしわしと乱暴に撫でられる。
「お前は俺の親父か」
「ああん？　お前には父親にふさわしいやつがいるだろうが。今回もあいつの治療のおかげで大事に至らなかったんだからな」
アザゼルが腕を戻しながら、ため息を含みながら言うと、眉をひそめた。
「響さんが来たのか？」
「たまたま近くにいたんだそうだ。まぁ、今頃モンゴルあたりにでも行ってるんじゃないのか？　千秋にケルト神話のやつにあってみたいとか言ってたらしいしな」
「……いつも通りだな」
『最上に自由奔放を謳う妖怪』とまで言われた、自らが思うがままに生きる妖焔山設立者に苦笑いそれから何回かが出てしまう。柴死雲外鏡という妖焔山にて最高の漢字の数である五つの漢字を持つ彼は、もう一人とともに妖焔山を作り、基盤を固めた時からふらっと旅に出てしまったのだ。それからほんの時たまにひょっこりと顔を出すという始末になったので、彼の唯一の弟子である鬼子母神である母様がその組織を任される形になってしまっている。最初の頃は気に入らなかったのだが、帰ってきた日にそれ相応といっていいほどの仕事を毎回するので、次第にそんな気持ちもなくなっていた。
「俺の神器研究にも口出ししていきやがった。しかも、それを実行した瞬間に失敗し続け

てたのがいきなり成功するから無性に腹立つんだよなぁ」
　それから何回か愚痴られてしまっている間にまた誰かが入ってきた。アザゼルよりも老けて見える堕天使の男だった。
「はじめまして、と言ったほうがいいのかな。私はバラキエル。君が助けてくれたのは私の妻と娘なんだ。心から感謝している」
「頭を下げる必要なんて必要ない。神社が必要な俺たち妖焔山から見れば巫女を失うのは得策ではないと判断しただけだ。礼を言われる筋合いはない」
「それでもだ」
　頭を下げられることに対してはあまり何も思っていない。自分が思っていることに何も偽りはないからだ。
「治療用の神器（セイクリッド・ギア）を一応持ってきたが、いらなさそうだし、俺は帰るぜ」
　アザゼルが立ち上がる。いつもならもっと愚痴を聞かされるので、不思議に思った。
「やけに帰るのが早いな」
「おれがバラキエルに無理してもらってるせいで、朱璃からの評価が悪くてなぁ。あったら何言われるかわかんねぇからな」
　翼を翻し、瞬間的に消える。アザゼルの言ったことからことから、ふと気になることを思い出した。

「バラキエルさん、だったな。あんたの奥さんと娘さんはどこに？」
「離れにいる。妻はまだ寝ているので、朱乃が隣にいてくれている」
「けがの状況は？」
「君と同じ状況といっていいのだが、朱璃は人間でな。耐性があまりないから、君より回復が遅い状態だ。だが、大事には至っていない」
　思わず安堵の息を吐いてしまう。自分がやったことが無駄になることにならなかったこと、妖焔山の助けになることが達成できたことができたことにたいしてだ。
「君は妖焔山の妖怪らしいな」
「あぁ、そうだが、それがどうした？」
「君らの本部は京都にあるし、支店である場所からもあまり近くない。なぜ君がここに？」
「俺の仕事はここら一体の監視、危険人物の排除だ。だからそれを実行した」
　妖焔山において、仕事を受けられるようになる条件は一つ。年齢が十三歳を超えること、ただそれだけだ。妖怪にとっての成人は十三歳であること、力の伸びがよくなるのがこの時期からで圧ことなど、様々な理由はあるがそれが条件だ。
「……」
　ちらりとふすまを見ると、そこに隙間があり、そこから一つの目が見えていた。

「お前、何してるんだ？」

俺が声をかけると、びくっと体を震わせたのか、目が見えなくなる。それに反応したのはバラキエルだった。

「朱乃？　何をしているんだ、入るなら入りなさい」

「……」

少し間があったが、そろそろと入ってきた。その表情はなんというか不満そうだった。

「何か俺にいたいことでもあるのか？」

てっきり俺は自分に何か言いたいことがあるのかと思っていた。だが、俺と目を合わせると、なぜか微笑んできた。そしてその笑みを父親に向けた。

「あ、朱乃？」

こちらを見ていないはずなのに後ろに黒いオーラが出ているのがわかる。

「お父さん、お母さんをみてきてくれない？」

「な、なぜだ？」

「いいから」

無言の圧力でバラキエルさんが退室せざるを得なくなり、二人きりになる。

「……ねぇ、なんであんなことが言えるの？」

雰囲気から彼女が俺にやめるように言ってきたときに言った返事についてだろう。
「俺が経験してきたことから考えた俺の結論。それ以上でもそれ以下でもない」
かつてのあの事件から俺がわかったことそのもの。むしろほかの意味がない。
「死んじゃうのは怖くないの？」
「怖くないわけじゃないが、怖がったら何もできない」
その言葉を聞くと、いきなりその両眼に涙をためだした。いきなりすぎて一瞬呆けてしまったが、思わず起き上がる。
「お、おい、どうした⁉」
彼女は俺の手を取り、ぽろぽろと涙を俺の手に落としながら、嗚咽交じりに言った。
「お、おかあ、さんをぉ、たずけてくれてっ、ありがとぉ」
「わ、わかったら泣くな」
女の泣くという行為は想像以上に大変だ。幼馴染に一人女がいるのだが、そいつの相手をしているからわかっていた。
「きみもぉ、痛かった、よねっ？」
「お前が気にすることはないから安心しろ。あくまで俺の失態だから」
「でもっ、でもぉ～」
我慢していたものが決壊するように大泣きをし始めたので、どうしたらいいかわから

ないわけじゃない。こういう時幼馴染にしていることがあるのだが、それをしていいものかと悩んでいたが、悩んでも仕方ないと結論付けた。
「落ち着け」
まだ動く左腕で、体の左前に立っている彼女を抱きしめる。ふぁっ、と声をあげるが、無視する。
「お前に何も責任はない。俺が戦って、自分でけがをしたんだ。自業自得だから、お前は笑顔を見せてやれ。そのほうがお前の両親もうれしいだろうさ」
頭をなでながら、泣き止むまで言葉をかけてやる。こうすれば落ち着いたことが多かったがゆえだった。少しすると優しく俺に抱き着いた。母親を失うかもしれなかった状況と目の前で起きた殺し合い。俺と変わらなそうな年だったが。俺が異常なだけで、普通ならあんな戦いを見て泣きさけばない時点で強い。俺はそう自覚はしていた。
「あ、あぁぁ、あああぁぁあっぁぁぁぁ……!!」
押し殺していた声までもが広がり、年相応の声をあげて泣いた。こうなってしまってはしばらくこのままだなとため息を吐きたくなった俺だが、外に通じる方のふすまの隙間から、一匹の鼬が入り込んできていた。
「お前、颯也(そうや)の使いか?」
「そうでございやすぜ、日向雅の旦那」

俺の友人には鎌鼬の矢武颯也という人物がいるのだが、魔力を持っている鼬となれば、そいつが関係している可能性が大きかった。その通りだったが。

「颯也の主人から伝言を預かってやすぜ。『体験でここまでする馬鹿がいるか、千秋様がそっちに向かってるからおとなしくしとけ』と」

「母様が!?」

今回は本当は仕事ではないし、俺は十三を超えてすらいない。上の決めたことで、実力などが問題ないと判断された人物は軽いものを体験することができるのだが、俺はそれをしていたのだ。あくまで内容は監視だけだったので、俺がした行為は普通では正式に妖焔山に入ったものがするっべき仕事ではある。

「では、あっしはこれで。今後とも主人をごひいきに」

するりと隙間を抜け、鼬は消えた。数分の間、朱乃をなでつ透けていると、どたどたと音が聞こえて、通路側のふすまが開く。

「随分と無茶をしたようですね、日向雅」

「はい」

明らかに不機嫌な母様のお出ましだった。

「あくまで監視だったはずですよね?」

「はい」

「今回のことは明らかに違反行為ですので罰を受けることになります、わかっていますね？」
「……はい」
母様の言っていることに何も間違いはない。今回は完全に自分の責任だ。助けを呼べばよかっただけの話だ。わざわざ俺が戦う必要はなかったはずなのにそうしたのは俺だ。
「待ってよ!!」
そのとき、俺に抱き着いていたはずの朱乃が母様に対峙するように立った。泣いた後の真っ赤な顔のまま。
「日向雅くんは私とお母さんを助けてくれたのに、なんで罰を受けなきゃいけないの!?」
「おい!?」
確かに朱乃から見ればこういうのは当たり前だ。だが、今回の問題は組織がかかわってくる。それでは話が変わってくる。
「あなたがバラキエルさんの娘さんですか？」
「……お父さんはお父さんじゃないもん」
ほほえみ問いかけた母様にほほを膨らませてそっぽを向く朱乃。こんなことで気分を悪くはしないだろうが、母様は怒るときは怒る人だ、少々怖い。

「そんなことより、日向雅くんが罰を受けるなら私が代わりに受ける！」
「おおい!?」
　さらに爆弾発言を投下した。
「ほう、あなたが日向雅の罰を肩代わりすると？」
「うん」
　勝手に話が進んでいく。俺がやめさせようと口を開いた瞬間、
「いいでしょう」
　母様が了承してしまった。これはまずい。母様は妖焔山では間違いなく良心の塊と言われてもおかしくないほどの優しい人だが、メリハリはしっかりとつける人だ。罰は相当につらいものに間違いない。
「では……」
　母様は人差し指を一本朱乃の前に突き出した。
「一か月、日向雅を看病なさい。その間、日向雅に無理な運動をさせないこと、おとなしくさせること、この二つを約束してください」
　俺は自分の耳を疑った。まさか、母様がそんな罰を……ん？
「日向雅は一か月の間、どんなトレーニングも禁止です。もちろんどんな小さなことも」
「いっ!?」

思わず変な言葉が出てしまった。俺の日課で一日の三分の一近くを鍛錬にしている。ほかにやることがないだけなのだが、それができないとなると、かなり困る。

「私だってあまり罰は与えたくないですよ。事情は師匠から全部聞いています」

それで合点がいった。鼬がここに来る速さ、母様が来た理由。近くに置いてあった時計から一日もたっていないこてや確認済みだったので、早すぎると感じていたのはあった。

「今回はこれで不問にします。いいですね？」

「は、はい」

「よろしい」

俺の様子を見てひと笑いした母様は原木エルさんの妻である朱璃さんに会いに行くと離れに行った。去り際に明野の耳に何かをつぶやいて。

「日向雅くん!!」

「うお、どうした？」

「か、介護頑張るねっ!!　ご飯作ってくる!!」

なぜか相当張り切っている様子でヘアの外に出て行った。何がどうした？

○

私は離れのふすまを開けて中に入った。

「お久しぶりです、バラキエルさん」

「ち、千秋殿!? 早いお付きで」

布団の隣で驚いた表情をする彼の横に座って、朱璃さんの顔を覗き込む。少し苦しそうだが、顔は血の気があって大事ではなさそうだ。

「日向雅をしばらくお願いしたいと思いまして、ここに来ました」

「彼を?」

「はい、ほかのことは娘さんに聞いてください。……そもにしても日向雅はやるようになりましたね」

バラキエルさんは何を言っているのかわかっていない顔だった。まぁ、もちろんそうだろう。

「あなたの娘さんが泣いていたみたいなのですが、それを抱きしめて慰めていたようでしたよ」

「んな!?」

「一応彼女にはこうも言っときましたよ、『日向雅を好んでいる幼馴染がいる』と」

バラキエルさんが娘をぉぉぉなどと叫んでいるが、それを後ろに聞きながら朱璃さん

に一回礼をしてから離れを去った。さて、夏箋（なつふだ）にどう言い訳しましょうか。

朱き少年と白き龍

「ふぅ……」
　広々と広がる和室の一室で、鬼の少女が一本の筆を硯へと置く。彼女の隣にはいくつもの巻物があり、数時間それに費やしたことがうかがえる。
「相変わらず、真面目やなぁ。さぼることも覚えなぁよ」
　女性とは思えないぐらいに着物を着崩しながら寝っ転がり、キセルを吹かす。灰色の髪は地面に扇状に広がり、口から出た煙は円を描く。
「はぁ、天奈。仮にもこの第四勢力　妖焔山のトップを担っているんですから、そういう発言は控えてください」
　天奈と呼ばれた女性はキセルを片手に持ちながら、かんらかんらと笑う。
「そんなに気を詰めとったら、いつか倒れるで。あんたのお師匠様みたいなことはでけへんよ。あの両極端な二人やったからこそ成り立っとたんや」
　妖焔山の創始者である二人組。そのうちの一人が現在、妖焔山のみならず、世界でも指折りの強者である千秋の師匠であるのだ。
「……はい、そうですね」

「せやから少しは誰かに甘えなぁよ。あてでもええ。あんたの子供らでもええ。あんたが一番甘えたいであろうあいつは今ここにおらんからな」
千秋は立ち上がると、部屋を出て行った。その顔が少しほころんでいるのを天奈は確かに見た。
「はぁ、相変わらず真面目すぎて硬いわ。あてじゃなかったんは少し残念やけどなぁ」
一人になった天奈はキセルを加えて、座ったまま何もないはずの後ろを振り向いて、ため息をついた。
「女の会話を覗くなんて、いい趣味とは言えへんで。アザゼル」
何もなかったはずの虚空から、ゆがみが生じ、和服姿の金髪と黒髪の初老の男性が現れる。その男性は背中に十二枚の翼をもっており、その天使のような黒い翼から堕天使であることがうかがえた。
「来た時にシリアスな話をしてたから入るには入れなかっただけだっつーの。まったく」
天奈の前に腰かけて、葉巻を口にくわえてジッポーで火をつける。数分の間、二人とも自分のくわえているものを楽しんでいるのか、はたまた会話がないのか音はたばこの煙を吐き出す音だけだった。
「んで、あんたが用もなしにうちにはこやへんやろ？　依頼か？」

「依頼っちゃ、依頼だな。サーゼクスやミカエルにお前らから伝えてほしいことがあるんだよ」

天奈はその内容の重要さに目を細めた。いまだに敵対しあっている第三勢力は、互いに情報を回すことがそれぞれの力だけでは厳しい。よって、その仲介役を頼まれているのが妖焔山なのである。

「あんさんが依頼するんや。よっぽど重要ってことやな？」

過去、このアザゼルが情報の依頼をしてきたことは一度しかないのだ。そのときもとてつもないほどの重要な情報だったのを思い出す。

「あぁ、……『概念所持者』が一人見つかった」

「っ!?　なんやて？」

概念所持者。それはかつての大戦で死した巨大な力を持つ者たちの力だけが生き残り、現代の何者かに宿ったもの。ここで概念所持者の厄介な点はその個人が持っている才能と能力、一神器《セイクリット・ギア》の上に追加されるということ。そして、その力自体は意志を持つかの如く、強者にしか宿らないのだ。

「ある意味では天災の始まりだな。しかもそいつは魔王、『一暴食《ベルゼブブ》』だったそうだ。これが意味するのは四大魔王の概念所持者もいるってこと。悪くいけば、一番外《エクストラ》までもが出てくる可能性がある」

「そいつの特徴は?」
「金髪の小さい女だったそうだ。悪魔らしいんだが、うちの幹部の光の槍を受けても平気な顔をしてたらしいから普通じゃないんだろうな。不思議な魔法も扱う、そんな奴だったと報告されたんだ」
悪魔なのに光が効かない。本当ならそれだけで異端認定されてもおかしくないのだが、それに魔王の概念まで持っているのならSSS級並みの危険人物である。
「わかった。あてらの使えるもん使って、報告できるもんは報告しとく」
「サンキューな」
安心したのか、大きく息を吐くアザゼルに苦笑いしながら、指を振る。空に浮かんだ酒瓶と杯が二枚飛んでくる。
「飲むか?」
「おお?　景気がいいなぁ。いただくぜ」
豪快に杯に注ぎ入れ、二人で一気飲み。飲み終わり、思いっきり息を吐いた後に天奈は気づいたことがあった。
「そういや、あんたのお気に入りの白龍皇はどこや?」
「あぁ、あいつか?　ここのやつで強い奴とやってくるそうだ。被害額はうちに請求しといてくれればいいよ」

◯

妖焔山中腹。木が低く、葉が多いため、それを押しのけないと前に進めない。普段そんな場所へ向かうことはないが、そんな場所へ向かう人物は物好きか人嫌いか。

「はぁ～、うっとうしい。こんなところに強い奴なんているのか？　アルビオン」

『いるはずだろうな。おまえ自身も感じているだろう？　殺気ではないが気迫を、な』

銀髪の子供が、虚空から聞こえる声と会話しながら木々の間を抜けてきている。一見すればシュールだが、この子が白龍帝ならば話は別だろう。

「ん？　なんだこれ？」

しばらく歩いていると、空中に赤い球がいくつも浮いているのが見えてきた。いつの球が飛んできたので、その子供はそれに触れようとするが、

『ッ!!　ヴァーリ、それに触れるなっ!!』

その声に反応して、後ろに大きく飛ぶが、赤い球は大量の矢じり上の刃物へと変わり、

周りにまき散らす。少し掠ったもののほぼ無傷で地面に降り立ち、周りを警戒する。
「爆発する魔力玉か？　……いや、これは」
『これは血だな。噂になった妖焔山の鬼の四天王の一人《血鬼》が近くにいるということだな』
「珍しいな。白龍皇であるお前が一匹の妖怪を覚えているなんてな」
『失礼な。強いものの名前は覚えるぞ、俺は』
いくつかの球はこちらに飛んでくるが、難なく避ける。奥を見ると、かなり大量に浮かんでいる。間はあるものの、無数に浮かんでいるせいでよけるのは至難に見える。
「くくく、いいなぁ。燃えるな」
空気中に浮くかのように滑らかに動くことで玉の間をするすると抜けていく。しばらく行くと、岩の上で両手を前に出し、指を細やかに少しずつずらしながら玉を操作している人物がいた。
『ほう、あの少年が血鬼なのか。つまりこの玉は血か』
「らしいね。銀髪の子供。見た目も合うし、何よりも実力がありそうだ」
ヴァーリは手に魔力の玉を作り、玉の間を通りながら岩の上の少年に一直線で飛んでいく。彼に着弾するかというその瞬間に、彼の服の中から出現した血が彼を守るように覆い、魔力の玉を防いだ。

「ひどいことするね。いきなりだなんて」
「ちゃんとあいさつはしただろう?」
目を閉じていたはずだが、いや、見る必要がなかったのだろう。魔力の玉を作るときに殺気をバンバン当てていたのだから。
「ちょうどいいから、新技の実験体になってもらおうかな」
片手を振るうと血の玉の一つ一つが一本の槍へと変わる。両手をヴァーリの方向へ伸ばしたとたん、すべての槍の切っ先が一気にヴァーリへと向く。
「くくっ、こうでなくちゃなぁ! 『白龍皇の光翼(ディバインディバイディング)』!!」
飛んできた槍を全ていなしながら、『ｄｉｖｉｄｅ!』という叫とともに背中に生えた翼を青く光らせて槍の力を半分にして、魔力の衝撃波で吹き飛ばす。
「君が今代の白龍皇か」
「あぁ、俺はヴァーリ。お前の言う通り白龍皇だよ、血鬼」
地面を思いっきり蹴り、一気に迫る。が、最初に魔力弾を防いだ血が引き続き、本体を守り続けている。
「お前自身は戦わないのか?」
「戦ったとしても、君には勝てないよ。僕は近接戦闘は強くないからね」
次は両手全体を使ってヨガのように振るう。すると、吹き飛ばしたはずの血が一箇所

に集まり、一本の巨大な槍と化した。ヴァーリはそれを察知し、飛んでくる前に撃ち落そうとしたのか、何発か魔力弾を放つが効いた感じはしないと判断し、空中へと躍りでる。槍はしっかりと狙いをつけ、一直線に向かってくる。

「ふっ、これぐらいしてくれないと困る」

飛んできた槍を真正面から向き合い、正面から殴ろうとする。一見すれば正気の沙汰ではないが、ヴァーリ自身の魔力を持ってすればできないことではない。ちょうどその二つがぶつかりそうになったその時、

「なにッ!?」

槍がまるで柔らかくなったように、拳を当てた場所から中へとめり込んだのだ。逃げようとするが、間に合わず、血にすっぽりと覆われてしまう。

「……こんな程度じゃないはずだよね？」

「もちろんだ!!」

血が瞬時に霧状に蒸発、その中を突っ切ってその顔面に一撃お見舞いしようとするが、謎の違和感とともに体が動かなくなる。

「……!?」

「わかってないって顔だね。君さ、最初に僕の血球(ゴルマータ)に触れて少しとはいえ、かすり傷を負ったでしょ？　僕は血という存在であれば、魔力を少し回すだけで操れる。今さっき

君を覆った血でその傷から魔力を流させてもらったよ。それで、ちょっと大人しくしてもらっただけだから安心してね」

ヴァーリはどうにか体を動かそうとするが、どうにも動かない。血を操られているということは全身を操られていることに他ならない。

「どう？　降参する？」

「……ふふふっ、くくくっ、いやぁ、こんなに興奮したのは久しぶりだ！　こんなに早くは終わらせられないなぁ」

背中の翼が「ｄｉｖｉｄｅ！」と叫んだ瞬間、地面が揺れ始める。

「なにしたの!?」

「なに、地面の耐久力を減らしただけだ。ここら一体な」

地面が崩れ、刹那にあった能力のブレを使って、拘束から抜け出したヴァーリはまた拘束されないうちに決着をつけようと全力で殴りにかかる。しかし、その進行方向にあった顔から

「っ!?」

たったコンマという時間ですらないはずのほんの少しだけ感じた死の恐怖。ヴァーリは久方ぶりに感じたその感触に身を守ったのが幸いだった。雲散霧消していたはずの血がすでに剣となり、ヴァーリに一太刀浴びせていた。

「どう、これでわきゃっ!?」
　体勢を立て直し、大きな笑みを浮かべてこちらを見たヴァーリのある部位を見た瞬間、顔を真っ赤にしてそむけた。そのことを疑問に思ったヴァーリは自分の体を見る。そこには先ほどの傷で切れてしまった自分の下着があった。そして自分の少しだけ膨らんだ胸が見えていた。
「こんなもの、なんでもいいだろ。早く続きを……」
「どうでもよくない!!　早く何か着てぇ!?」
「そんなこと言っても、着るものなんて持ってないぞ」
「あぁ、もう!!」
　後ろを向いて右手をヴァーリのほうに向ける。前アリにあった血がヴァーリの体の周りに巻き付いた。ヴァーリ自身はそれに警戒したが、体に巻き付いて出来上がったものを見て驚いた。赤と黒でできた着物が自分にぴったりに出来上がっていたのだ。
「それ着ててよ。あう～」
　ヴァーリにそれを着せた後、こちらを見るがすぐに顔を赤くして沈んでしまう。
『……興ざめだな。こんな終わり方をするとは』
「へ～、おまえの能力万能だな」
　彼女の背中に生えている白い翼が青く光りながらしゃべる声に、振り返る。

「それが、白龍皇　アルビオンの声なの？」
『あぁ、そうだ。俺こそが白龍皇　アルビオンだ。先ほどの戦い、ヴァーリを圧倒するとはなかなかだった。久々に強い奴を見たな』
「二天龍に褒めてもらえるなら光栄だよ」
どうやらいつもの調子を取り戻した様子だったので、ヴァーリはその顔を覗き込んだ。
「おまえ強いな。今まで俺と同等に戦ったやつはいなかったぞ。あと、続きはしないのか？」
「悪いけど今度にしよう？　こんな状況でやるのもあれだし、……その、君のその服は少しでも破れちゃうと形を保ってられないから、すぐに着替えてね」
人差し指同士をくっつけてもじもじする様子はほほえましく感じた。二人の身長はほぼ変わらない、いや、ヴァーリのほうが少し高いくらいだったので、ヴァーリはいたずらっぽい笑顔を見せて。
「ふ～ん。これ少しでも傷つけたら、さっきのお前の顔を拝めるんだな？」
「やめてぇ!?　女性がそんなことを人前でするものじゃありません!!」
顔を真っ赤にしてヴァーリを説得しようとするその様子がおかしくてヴァーリは笑みを浮かべた。

「そんなに言うことなのか？」

「いぅよ!?　女の子なんだからそんなことしたらいけないの!!　そういうのは自分が好きだとか、認めた人にしかしちゃだめ。わかった？」

「む、むう。わかった」

その気迫に思わず納得してしまった。そのことも含めて何かおかしくて笑ってしまう。

「いいなぁ、気に入ったよ。そういえば、名前効いてなかったな、名前は？」

「…………えっ、あっと、グランだよ？」

「どうした？」

ヴァーリが疑問の顔を向けると、口元に自分の手を持っていって笑いながら答えた。

「いや、そんなにかわいく笑うんだな～って」

少しだけ風が吹いた。二人の髪が揺れる。その髪でヴァーリの顔が隠れたままグランがいる方向とは逆に顔を向ける。

「……そ、そうか」

ヴァーリは自分の心臓がとても早く拍動を打っているのを感じた。自分の顔が赤くなるのも感じている。まるで火でも吹いているかのようだ。

（お、俺はかわいいのか？）

常に戦いに身を置いてきたヴァーリにとって、かっこいいとかこわいとは言われたことがあったが、かわいいとは言われたことがなかった。自分自身でさえ、かわいいとはどんなものかはわからなかった。

（な、なんでだろうか、嬉しいなぁ）

なんとなくだが、嬉しい。そう感じながらグランの手を後ろを見ないままとる。

「な、なぁ、ここら辺を案内してくれないか？　グラン」

「ん？　別に構わないよ。美味しいぜんざいが食べれるお店があるから、そこへ行こうか」

調子が戻ったグランと訳がわからない感情に支配されるヴァーリ。二人は手をつなぎながら妖焔山の下腹にある商店街へと向かう。

ぜんざいを食べた後に食べ歩きをしたせいでグランの財布が空になったのは余談である。

聖剣計画と文字昇格試験

　妖焔山に入ることはいたって単純だ。個人名、妖怪としての名前、年齢を書けば働くことができる。かといっても、この妖焔山という組織は何も妖怪だけを受け入れるわけではなく、悪魔、天使、人間問わずここで働くことができる。仕事など細かい点ではだいぶ違うが、差別は一切していない。それぞれの勢力ではぐれてしまったもの、はぐれ認定されたものなどが来ることが多い。はぐれの場合はその人物が属していた勢力と相談し、ここに入れるかどうかを決める。よっぽどな犯罪者でない限りはここに入ることができる。これは創立者の一人、紅黒零狼王が提案した案をできる限り実現したものになっている。
　今、その妖焔山に入りたいと志望した志願者たちが本部の庭に集められている。実を言うと、ここにいる人物は極端に多いわけではない。妖焔山は二つ文字になるまでは自由に依頼を受けていく、いわゆるクエスト形式になる。ここの依頼は比較的軽いものが多い。対して、二文字や三文字持ちになると個人へ指定して依頼するようになる。ただし、よほどの実力者でない限り文字すら持てないので、強くなりたいなどの気持ちがない限りはここへくることが多くない。妖焔山の管理下にある土地にいれば、安全は保障

される。なので入ることは自由だが、実際は強者だけがここに入る。

「おお、今回は少し多めやなぁ。最近は地方の分社へ心願するもんが多くて、本部への志願者が少なくて困っとたんやけど、こんだけおれば問題あらへんなぁ」

　妖焔山の本社である、和風の城の中から出てきた巨大な鴉の翼をもつ艶美な女性。それは常時この妖煙山に在住し、数えたら両手で足りる数少ない四文字持ち、『災颪（わざわいおろし）天魔（てんま）』灰神流（かいかんな）天奈（あまな）だ。

「わざわざなんか言うこともあらへんのやけど、文字持ち目指して頑張ってや～」

　手をひらひらと振る。文字を与える権利を持つのは柴死雲外鏡ただ一人なのだが、基本その任命権を鬼子母神である母様に委任している。ある程度仕事をこなし、実力を認められれば、文字持ちとして認められるかどうかの試験を受けられるようになる。それを達成した時点で文字持ちになる権利が与えられる。

「文字持ちになれば、受ける依頼も報酬も優遇される。何よりも単純な仕組みだよね」

「グランか、いつからいたんだ？」

「日向雅の近くに来たのは今だよ。さっきまでここにいる人の顔を見ていたんだ」

　隣に来たのは銀髪の吸血鬼であるグランだ。だが、今は両翼がある状態になっている。グラン自身は片方の翼がないのだが、自らの血を操る魔法で翼を形作っている。それを利用し、自分の体型も変えることができる。そのうえ、ほかの種族の血をまとうこ

とで、日の下で動くこともできる。

「あ、そうや、いうの忘れとった。杵槌　日向雅、グラン・スカーレット、無梢戯　骸の三名は文字持ちへの昇格試験を受けるように響から言われとる。早めに千秋のところへ行きなぁよ」

　周りがざわめく。それはそうだ。組織に入った時点で文字持ちへなるということはそうそうないことだし、一人でも珍しいのに三人いる。俺が一番気になったのはグランのほかに呼ばれたもう一つの名、無梢戯　骸のことだった。

「ケッケッケ、俺をお探しかい？」

「「!!」」

　グラン、そして俺の真後ろにいたのは小学生ほどの身長の細めの男だった。グランのような銀髪というよりは、老人の白髪を思わせる髪。全体的に細いため、押してしまえば倒れてしまいそうな雰囲気だった。腕もまるで幽霊のように、両手を前に出しながら力の入っていなさそうな両手を揺らす。

「そんな怖い顔すんなよ、同期になるわけだしなぁ、ケラケラケラ」

　骸という名のように骸骨が揺れるように笑う。妖怪であるがゆえに不気味だと思わせるほど強いのは確かだ。

「……そうらしいな、よろしく、骸」

「あぁ、よろしくだぜぇ、長い付き合いになりそうだよなぁ、日向雅とグランだっけかぁ？」

「あ、ぅ、ぅん。よろしくね、骸」

軽く握手を交わす。本当に力を入れてしまえば、折れてしまいそうだった。だが、妖怪の人型は最も恐れられている姿に近くなる。だから、この姿が一番強いのだろう。

「ケケッ、そろそろ行こうぜ。鬼子母神様を待たせるわけにゃいかんだろ？」

「そうだな」

「あっ、まってよ～」

本部の中へと入る。目指すは最上階にある母様、鬼子母神の部屋だ。

○

「おっと、俺はこっちらしいなぁ」

最上階へと上がる階段を抜けた先、そこには二つの通路があって、その片方にある看

板に骸の名前が書いてあった。
「別れるのか？」
「らしいぜ。つーわけでまたなぁ」
「頑張ってね」
「おめーらもなぁ」
　ふらふらと看板を超えて、通路の先へと行く。
「母様の部屋は逆なんだけどなんでだろう？」
「さぁな。響さんの差し金じゃないのか？」
　そんなことを話しているうちに母様の部屋の前についた。ノックをして中に入る。
「失礼します。杵槌　日向雅参りました」
「同じく、グラン参りました」
　頭を下げながら、部屋の中に入ると、
「はふぅ～、ししょぉ～」
「猫みたいだぞ、お前。……ん？　きたか」
　胡坐をかいている響さんに対して、抱き着きながら撫でられている母様がいた。
「ひゅ、日向雅!?　グランまで!?　あぁっと……」
　身だしなみを治すが、いつも皆の前にいる雰囲気などかけらもない。

「今更遅いぞ、千秋」
「ひゃわっ!?」
響さんが母様の頭をつかみ、自分の膝へ戻す。ついでに撫で始めたので母様の顔がまた緩み始める。
「さて、お前らを呼んだのは、文字持ちに昇格のための俺からの依頼の説明のためだ。あと、結果次第では二文字も考えてやる」
文字を与えることができる権利を持つ響の依頼をクリアすることは、いわゆる文字持ちになれる唯一の方法なのだ。が、彼が大分気分屋であるせいで、依頼を出す時も完全に気が向いたらというなんとも適当なのである。故に文字持ち昇格の依頼を受けさせてくれるこの状況は千載一遇のチャンス、それも飛び級ならなおさらだ。
「そんな簡単にいいんですか?」
「日向雅の言いたいことはわかるが、お前らの実力は四文字持ちの地方のリーダーたちも認めてる。それに、ある意味お前らは爆薬だ。十数年しか生きてないお前らが文字、しかも二文字になってみろ。気が緩み始めてる他の奴らに対しての激励に近いこともできる。俺は別にお前らを三文字にしてもいいと思うんだが、さすがにそこまでしちまうと、贔屓されてるって思われかねねぇからなぁ」
さらさらと理由を述べる。この人のすごいところはどんな滑稽なことでも真っ当な

理由で言いくるめてくる技能だ。こんなのはあくまで一片にしか過ぎないが、これだけでも初見のやつからすれば、腰を抜かすかもしれない。
「それで、依頼の内容はなんなんです？」
「簡単に言えば、ある計画の阻害または破壊かな？　ミカエルからもらっていた資料から考えた、俺の考えが間違っていなければ、このあたりにいるはずだ」
そう言って資料を投げ渡してくる。そこは今の時期ならば豪雪地帯である場所の山奥のことが書かれていた。
「こんなところに？」
「その計画はほぼ終わりかけだろうけどな」
「それでは行く意味が無い、なんてわけ無いでしょうから、それを実行している人物を捕まえてこいってことですか？」
「自由にすればいいんだよ。グラン、お前は読みすぎだ。そこまでしたいならすれば良いんだが、お前らがしたくてできることをやれば良い。それが試験なんだからな」
日向雅とグランは顔を見合わせる。満面の笑みを浮かべた響は指ぱっちんの用意をして二人に言う。
「制限はいまから半日、お前らから見て逢魔が刻までだ。んじゃ、いってこい」
ぱちんと音が響くと、二人の足元に鏡が現れ、姿が掻き消える。

「あとはお前に任せたぜ?」
後ろの襖の奥にいるであろう人物に声をかけて、響は千秋の頭を撫でながら茶を飲んだ。

○

「おっと」
慣れたように雪の上に降り立つ。響さんの移動は基本、鏡による瞬間移動なので、これが普通なのだ。
「日向雅、すごいね。僕、まだ慣れないよ」
まだ慣れていないのか、グランは雪の上に尻餅をついている。雪を払いながら立ち上がるのを見ながら、周囲の確認をする。基本、木しかなく、雪がはらはらと降っている。風はほとんど無いし、そこまで降っていないので視界の邪魔にはならなさそうだ。
「逢魔が刻、日が沈んだらその時点で時間切れか。グラン、その研究所を探せるか?」
「もうやってる。ただ時間はかかるけどね」
手を地面につけ、指先から血が出て、地面の上を走り、蜘蛛の巣状に広がっていく。
「どれくらいだ?」

「範囲次第だけど、資料から見れば五、六時間は行くと思う。この近くに街は無いはずだがら建物があり次第中も調べる」
「了解した。少し体をここに慣らすが良いか？」
「構わないよ」
　俺の加速は魔力によるものだが、魔力だけによる放出（ブースト）ではなく、魔力による全身の強化（パワーアップ）なので、加速するのなら、走る必要がある。雪の上だから、地面の上よりも加速度が減るので、そこに慣れておく必要があった。体を動かすと違和感はなく、普通よりも加速度は低いものの、いつも通りだった。
「どうだ、グラン」
「今のところ建物は3つあったけど、全部廃墟だよ。地下もなかった」
　その時、わずかに視線を感じ、後ろを振り返った。が、近くに人影らしきものも動物もいない。
「気のせいか……？」
「ん？　日向雅、ここの辺りは平坦なはずだよね？」
「そのはずだ」
　響さんから渡された資料から、ここら辺り一帯はほぼ平坦、山も無い。
「ならなんで……？　いや、もしそうなら……」

「何を見つけた？」
「洞窟だよ。無いはずの崖にあったんだけど、どうにもきな臭い」
「そこが何かしら関わりがありそうだな、グラン、行くぞ、纏え」
　その言葉に反応したグランの体がどんどんと紅く染まり、真紅になる。そして液体状になったかと思うと、俺の体にまとわりつく。全身を覆うローブのような状態に変わり、普通の服と変わらないようにも見える。
「……全血（トゥーサング）」
「方向は？」
「南南東、６４マイル」
　聞くや否や、その方向へと体を向け、一気にスピードを上げる。
　俺がスピードを出せるのは、魔力の質以外にも体格にもある。普通の鬼の男性の場合、しっかりと筋肉がついた、言い換えればムキムキな人が多い。もちろん、俺のような例外も存在し、細い人物がいないわけでは無い。スピードを出しても問題無いように俺の体は細くしなやかだ。ただ、加速度が異常に高い俺の魔力の場合、少しでも体型が変わると、それが大幅に変わる。故に大きな荷物などを持ちながらなどの場合は、うまく動けないことも多々ある。今回の場合、グランは日向雅の移動速度に追いつけないことも踏まえ、彼自身が血となり、服のように形を変えて、ひっつくというのが一番いい

方法だと考えたのだ。
「日向雅、中に侵入を成功、どうやらカモフラージュ的なものみたいだったから、想像異常に楽だったよ」
「様子は？」
「中には建物が1棟。……ビンゴ！　実験体と思える、少年少女を十二人確認。毒ガスがまかれてる上に全員弱ってる！」
「響さんのまさに言葉通りだな、くそっ」
「全員に僕の血を仕込んだから、少しは持つよ！」
一分もしないうちに無いはずの崖が見える。外見的にはそり立っていて普通ならとても登れそうに無い。
「問題無いからそのまま飛び込んで！」
「応！」
自分の体をシャボンのようなものが覆い、割れるような感覚。一瞬で景色が変わり、崖がなかったように移動できる。結界らしきそれを通った瞬間、教会に似せた建物が見える。
「あれか！」
「入ってすぐ！」

扉を、腰にさせていた金棒で叩き割り、中に入る。紫色の薄い霧が充満し、十人程の子供が倒れていた。争ったような跡さえある。

「日向雅、口と鼻を僕の血で覆うから、全員を外に連れ出して！」

自分の口と鼻が血で覆われるのを確認する前に飛び出す。一気に全員を運び出すのは不可能。二人ずつ数秒で外に運び出す。全員を運びきるとグランが血液上のまま、彼らのうえに覆いかぶさる。

「体内の毒素を抜くのに少し時間がかかりそうだから、周りの警戒をお願い」

グランの二割ほどが俺にくっつき、顔を覆う。そして俺は空へと跳んだ。

〇

逃げた。生きると約束しあったみんなを置いて。

僕はもう動かない足を引きずり、木々にもたれかかりながら必死に進んだ。むき出しの足はもう真っ赤で感覚なんて無い。頭もフラフラする。

その時、何故かはわからない。衝動に任せて、後ろを振り返った。

紅く光る人影が夕日に重なった。

目がくらみ、目を閉じて開けた時にはもう空には何もなかった。

「あっ」

それに気にしていると、何かにつまづいて前に倒れた。痛くは無い。ただ雪の寒さが体にしみていく。

（あれはなんだったんだろう……）

倒れてからもそれについて考えていた。

（みんなの魂……？）

勝手にそう結論づけた。そう思うとみんなの思いが蘇り、

「まだ死ねない……！」

感覚の無い手で雪をつかみながら、体を起こそうとする。

「みんなの無念を晴らすまで……！」

しかし、起き上がれない。諦められないのに諦めざるをえないこの状況に歯噛みしかできなかった。

「どうせ死ぬなら私が拾ってあげる。私のために生きなさい」

最後に目の端にまた紅い何かが見えたのが最後に気を失った。

三文字に達したい者たちと進めぬ者

妖焔山には、文字を持つ者たちに文字が多ければ多いほど待遇が良くなるような仕組みが存在する。一文字であれば、妖焔山に存在する店などで割引をしてもらえるなどの大きい待遇とは言いがたいものだが、四文字ともなれば訪れた妖焔山の本部や各所に存在する地方の本部などで最上級ホテル並の接客をしてもらえるなどの好待遇が約束される。待遇としてではないが、文字が多ければ多いほど部下のような存在が増えていくのも確かである。

妖焔山では一般的にチームを組むことを推奨される。一文字などでは一人で依頼をこなすのは大変だからというのが理由となっている。だが、このチームを組むとき、リーダーとなる人物の文字数に最低でも一つ少ない人物でないといけないというルールが存在する。これは、メンバー内の実力が離れすぎず、チームを組みやすくするためである。

「困ったな、これは」

先日あった三文字昇格試験に合格した『光抜鬼』杵槌　日向雅。

「どうしようか」

同じ試験に合格した『紅血鬼』グラン・スカーレット。
「こりゃ大変だぜ、カカカカッ」
二文字昇格試験に受かった『反骨』無梢戯　骸。
日向雅の自室にその三人はいた。試験に合格したあとに投げつけられた解決しなければならない難題に対して頭を悩ませていた。
「数少ない四文字持ちの過半数に認められろ。よほどお前らの三文字昇格が他の輩は気に入らなかったみたいだなぁ、クカカカカッ」
そう、響が考えていた二人の三文字昇格に対して四文字をはじめとした多くの文字持ちたちが反対の意思を表明し始めたのだ。響自身も少し意外そうな顔でこんな提案をしたが故に三人は悩んでいる。
「仕方ないぜ。ただでさえ例のないほどの速出世だし、おまえらが鬼子母神の子供として扱われている以上、依怙贔屓がないとは言えないからなぁ、大変だぜ、けけけ」
「まぁ、解決するしかないのは確かさ。でも、これ、相当きついよ」
現在、妖焔山に存在する四文字持ちは
『鬼子母神』猿飛　千秋
『災凮天魔』灰神流　天奈
『艶狐九尾（えんこきゅうび）』八坂

『明鏡止水』ぬらりひょん
『操踊三毛』参曲
『百物語妖』山本　五郎左衛門
『江戸物怪』神野　悪五郎
『爆潰鉄鬼』新庄　剛太郎
『力借之狢』北水　軌響
『魔絶鏡剣』ラグナシア
『天狼斬裂』狗翔　曙

　この十一人である。

　中でも反対の大半を占めるのがぬらりひょん、山本　五郎左衛門、神野　悪五郎の三名だ。それは彼らの下にはまさに百鬼夜行とも言えるほどの大量の様々な妖怪がいるためでもある。しかも、今現在、山にいない『紅黒零狼王』のお付きをしている『力借之狢』は参加できず、『魔絶鏡剣』、『天狼斬裂』は反対の意思を表明。この時点で反対派は五人。一人でも反対した時点で終わりである。そのうえ、全員が参加したとしても五人。これでは過半数とは言えない。

「まず条件が成り立ってないよ。こっちがどうやっても勝てないようになってる」

「反対派の誰かを引き込めってことなのか？　だが、反対している人は全員こっちには

こないぞ。一度決めたら曲げないような人ばかりだしな」
　頭を悩ませる二人に対し、骸自身は不敵な笑みを浮かべながら、口を開く。
「なぁ、他の五人の四文字にお前らが三文字に相応しいって表明できんのか？」
「たぶん大丈夫だとは思うけど。八坂さんは颯也を、参曲さんは夏箋を気に入ってる。説得を手伝ってもらえば、ほぼ説得できるはずだ。問題は……」
「『爆潰鉄鬼』ってわけか。なるほど、分かった。よし、お前らはそいつを頼むわ。俺がもう一人四文字を連れてきてやる」
　もう一人の四文字という単語に二人は目を見開いた。いま、反対派に引き込める人はいない。
「軌響さんを連れてくるっていうのか？　それこそ無理だ。亮介さんのお付きをしてる上にどこにいるかわからないんだぞ？」
「ちげえよ。こっちの見方をしてくれる四文字がもう一人いるのさ」
　どうもホラには感じられない。そう思えてしまう、いやそう思いたいのだ。
「日向雅、骸に任せてみよう」
「……わかった。頼むぞ、骸」
「くけっくけっ、任されたぜ」

〇

骸と別れ、僕と日向雅は『爆潰鉄鬼』である新庄　剛太郎さんが住まう本山の中腹にある巨大な屋敷に来ていた。四文字である妖怪たちは少なくとも千年近く行きているものたちがほとんどで、その中で最も若いのが剛太郎さんなのだ。公平でしっかりした妖怪だと聞いている。

「さて、いこうか？」

「そうだな、いつまでも待ってるわけにもいかない」

その屋敷の門の前に立って扉を叩く。するとすぐに中から返事があり、扉が開く。

「お待ちしておりましたぁ。杵槌　日向雅様ぁ、グラン様ぁ」

出てきたのは中肉中背の女性だった。ただ、特徴として白い犬のような耳と尻尾がある。たぶん、白狼天狗の一人なんだろう。

「私、梅と申しますぅ。剛太郎様がお待ちですのでぇ、奥までご案内しますねぇ」

ふわふわとした雰囲気で空気が和んでいくのがわかるが、日向雅は緊張感を保ったままだった。さすがだなと思いながら、奥に案内される。

「剛太郎様ぁ。お二人をお連れしましたぁ」

ふすまを開けて僕たちを中に入れるように促すのを見て、中に入る。
「待っておったぞ。若き戦士たちよ」
奥にいる人にしては巨大すぎる体格の男が座っていた。肌は赤黒く、頭の上には二つの対をなす角が上向きに生えている。顔自体は人のように見えなくもないが、下あごにある二本ある牙が鬼らしさを表現していた。着物を着ているが、それでも力強さがひしひしと伝わってくる。
「お主らがわしの所へ来るのも時間の問題と思っていたが、なかなか早かったな。まぁ、いい。そこに座れ」
「「失礼します」」
目の前にするとその力の威圧感で体が震えそうになる。でも、震えてはいけない。これはこちらからの願いでで始まるのだから。
「お主らの目的はわかっておる。わしはお主らが三文字になるのを良いと思ってはおる。響殿がふさわしくないものに文字を与えるようなことををする人物ではないのもわかっておるからな」
「……認めるにはなにか条件があると？」
僕たちに対して遠回しに何かをさせようとしているのが感じ取れた。
「うむ、そうだ。三文字は我ら妖焔山の評価に直結する。実質的、四文字は依頼を受けて

動く何てことはほとんどない。大方統治などの仕事に回るからな。一般の依頼を受ける一番上が三文字だ。ゆえに難しい依頼が来る」

十一人の四文字はそれぞれの勢力の統率をすることが役割となっている。だけど、それは誰もが知っていることだ、どうして今それを僕らに？

「まことに情けない話だが、お主らにはわしでは解決できんことを依頼として受けて、それを達成して欲しい。そうすれば、わしはお主らを全面的に押そう」

「あなたが解決できない、ですか」

「あぁ、単純だがわしの息子についてなのだ」

新庄　剛太郎さんの息子といえば、若手妖怪の中でも上位にいる二文字『力砕』と呼ばれる新庄　凱太郎という男だったはずだ。

「最近、あやつから覇気を感じられんのだ。二文字に昇格して少しした後だったのだが、わしには一切話そうとせん。悩んでおることは確かなのだが、許嫁である梅や他の者にも話してはおらんらしい。そこで、お主らにはこの依頼を頼みたい」

三文字ともなれば達成条件があやふやな人との間にあること、心情的なことも依頼としてされることもある。ただ、頻度は少ないだろうし、そうそうこない種類なのも確かだと思う。

「覇気を取り戻して欲しい、と？」

「いや、そこまでは言わん。だが、あやつのあのような顔を見とるのは少々辛いのでな」
凱太郎はいつも鍛錬をしている場所を決めているそうなので、そこへと向かう。その途中で、考えをまとめようと日向雅に尋ねる。
「どうする？」
「何に悩んでるかによって変わるだろう？」
「作戦を考えておくに越したことはないからね」
とは言ったものの、実際は聞いてみないとどうしようもない。剛太郎さんの屋敷は妖焔山の中腹だが、向かった先は山の麓近い、修練場としては一番小さい場所だった。修練場と言ってもそんなに豪勢な場所ではない。例えるなら野球場とかが近い。周りには座るための場所がある壁が円状にある。修練場というより闘技場かもしれない。これは亮介さんの趣味だ。
「あれか」
その修練場の中に入ると、一人だけが汗だくになりながら体を動かしていた。体格はがっしりとしていて、筋骨隆々と言ってもいいほど身体中ムキムキだ。でも、鬼らしさよりも人間らしさの方が強い。肌や顔も鬼と一目で判断しにくい。
「むっ？　ここで訓練をしに来たのか？　すまぬな、小さい場所なのに真ん中を堂々と使ってしまって。少し待ってくれ。休憩したら端による」

「寄らなくてもいいよ、僕たちは君に用があってきたんだ。新庄　凱太郎さん、いや『力砕』と呼ぶべきかな？」
　額の汗をぬぐい、地面に座った彼に単刀直入に言う。行員のは隠しても意味ないからね。
「すまない、俺は君たちにあったことがあるだろうか？」
「ない。だから、名前ぐらいは名乗る。杵槌日向雅だ」
「グラン・スカーレットだよ」
　僕たちの名前を聞いた瞬間、目を見開く。そして、息がまだしっかり整っていないが、立ち上がって頭をさげる。
「これは失礼をした。『光抜鬼』殿、『紅血鬼』殿。それで、私に用とは？」
「端的にいえば、あんたが今言った文字のことだ」
「文字？」
「うん。僕ら三文字を与えられたんだけど、何人かの四文字に反対をされちゃってね。それで、響さんに過半数の四文字に認められろって言われたんだ」
　その話を聞くと、凱太郎さんは表情少し暗くさせる。
「ふむ。状況は把握しました。父上が認める代わりに私をどうにかしろとでも行ってきたのですか」

「簡単にいえばそういうところだ。あと、敬語はいらない。あんたは俺たちよりも年上のはずだろう」
「そうか？　なら普通に話させてもらおう」
暗い表情ながらも少し笑いながら答えた。……見たところ問題があるのは本人自身。感じた性格から感じても、自分だけでどうにかしようって感じの人だと思える。この人の悩みは少し大きそうだ。
「いや、わかってはいる。俺が何かに悩んでいることだろう？　すまないがこれは俺が超えるべき問題だ。君たちには関係はない」
「関係ないで済まされちゃ、こっちが困る。ただでさえチャンスの少ない文字試験で合格したんだ。それで文字がもらえないのでは洒落にならない。正直に言うが、俺やグランは三文字になるのに必死だったからな。お前を痛めつけてでもいいと思っている」
文字の数の差は待遇や依頼の難しさだけじゃない。何より違うのは情報量だ。三文字は基本的に妖焔山のほぼ全ての情報を知ることができるようになる。あらゆる勢力からの依頼を請け負っているこの妖焔山の情報力は並外れている。その上、響さんは世界中の全ての情報を文字通り知っている。それはあの人が新しく作った鏡によるものだ。僕も日向雅もそれで知りたいことがある。どうしても、どんなことをしてでも。
「そういうことだよ。諦めて話すか、ボロボロにされてから話すかのどっちかだ、決め

ろ」

いま、ぼくは嫌な顔をしているんだろうな。彼女たちが見たら、気持ち悪いっていうかな。

「……俺一人で、君たち二人に勝てる気など微塵もしない。万に一つもありえないだろう。だが、話さん。これが答えだ」

日向雅が腰にさしている金棒を抜いた。姿が掻き消えたのと同時に巨大な音と風が巻き上がる。凱太郎さんが吹っ飛ばされ、近くの壁にぶつかる。防御はほとんどできていなかった。反射的に体に力を入れたんだろう。怪我は少なかった。

「ふむ、一撃は弱いな。だが、あの速さ見えんな。手数で攻められては抵抗できん」

冷静に日向雅のことを分析している。攻撃されたことには何も言わない。覚悟はできている、逃げもしないか。決めるのが早いことも考えると、悩みが戦闘関係ってことかもしれない。可能性の一つだけど。

「さて、面倒だ。加減はしないから、せめて死ぬなよ」

ここで僕まで参加したらいじめになるよね。僕は傍観に徹するかな。一応、周りに被害が出ないようにしておこうかな。見るのは簡単な光景だ。まぁ、日向雅が一箇所で攻撃によって動けなくなっている凱太郎さんをいじめているだけなのだが。

「日向雅はしっかりしてるよ……」

実を言えばこんなことをする必要はない。僕の血を彼に流し込めば、少なくとも暗示をかけて喋らせることはできる。でも、これは呪術に近い。日向雅は呪術を嫌っている。それに、これはかけた相手の意思が関係なくなる。こういうのを好む妖怪もいるが、こういうのは嫌いだ。ただ状況による。僕は使うのを拒否しないが、日向雅はこういうのを全く好まない。
（この大きい音のせいか、普段この辺りにいる力を持たない小妖怪たちの気配も感じられない。いや、一体こっちに寄ってくるのがいる。妖気からして、一文字ってところかな）
「日向雅！　一人、こっちに向かってきているやつがいるけど、どうする？」
「ほっとけ！　かまっている暇はない！」
仕方ないか。日向雅も日向雅で楽しんでるみたいだし。そろそろ着くかな。そう思った時、壁を超えて一人の人物が刃渡だけで2メートルはあるようなものを振り上げて飛びかかってきた。
「……えい!!!」
飛びかかってきたのは色黒で茶髪のツインテールを持った小さな女の子だった。身長的には僕よりも小さい。日向雅に向かっていたので、血を使って防ぐ。防がれたことが不満なのか、彼女はこっちを見て、剣を向けてきた。

「……邪魔しないで」

彼女なりにすごんでいるのだろうが、声に覇気がないせいか、表情があまり変わっていないせいか、怖く感じない。

「ミネルバか!? なぜここにいる!?」

「大きな音がして、来てみたら凱郎がいじめられてた。だから助ける」

ミネルバと呼ばれた彼女は自分の手にある巨大な剣を槍投げのようにして、僕に向かって投擲する。僕は血を触手のようにして、剣を絡め取る。しかし、剣そのものが霧散して、彼女の手の中で再構成される。

「創造系魔法か。面倒だなぁ」

「面倒じゃない。すぐ終わらせる」

「こんな見た目だけど一応三文字だからね。そう簡単には終わらせないよ」

その時の彼女の反応は驚いたというのがよくわかった。すると、同じような巨大な刀身を持つ剣を創り上げ、それぞれを片手で持ち上げる。重くないのかなぁ?

「ここから本気。行くよっ!」

○

俺はいわゆる名家に生まれた。妖焔山に貴族というものはないが、家柄のいいものはある。三文字のほとんどが家を持っているから、四文字ともなれば豪邸を持っている。俺はそこで父上に武術を含む生身の身の戦闘を多く習った。その時はそれが当たり前のことだと、強くなることが普通だと思っていた。

１０歳になった時、俺に許嫁が二人いることを知った。一人は父上の嫁の血縁者の子供である、白狼天狗の梅。そして、同じ鬼でお転婆な凛という三文字の親を持つ子だった。１０歳の誕生日にその二人に会った。二人とも美人で、こんな綺麗な娘がと不思議に思ったものだ。二人とも俺にのことが好きだと言ってくれた。その時は俺がこの娘たちを守るんだと思った。

妖焔山に正式に入ってしばらくした時に見つけたはぐれ悪魔の小さな女の子、ミネルバ。俺は捨てておけず、自宅に連れて帰って飯を与え、父上に話した。はぐれに関しては妖焔山の一番上に通さなければならないらしい。そこで、その人を父上が呼んだ。

「お前が剛太郎の息子か？」

銀色の髪を持った男だった。見ただけで、その目に見られただけで、今まで鍛えていた自分が小さく見えるぐらいの強さを感じた。恐怖、畏怖、そんなものではかたずかない。例えるなら魔王に睨みつけられた普通の人間のように。

「そんなに怖がんなよ。そこにいるミネルバだったな？　そいつについてはここにいて

いいそうだ」

はいと言ったつもりが喉から息しか出ない。そこにいるだけで喉元に何かを添えられているようだった。

「ん〜、やっぱり、俺を初見で見るとそうなるのか？　日向雅やグランがやっぱり普通じゃないのかねぇ。いや、お前は俺自身を恐れちゃいるが、別のものにも怯えてるなぁ」

いつの間にか目の前にいて、俺の目を覗き込んでいた。綺麗というより艶美なその目に全てを文字通り見透かされている。そう確信した。

「お前は怯えてるな、俺のあり方に。お前は怖がっている、お前のあり方に。お前は知りたくないんだな、お前が求める生き方に」

「え？」

「おっ、声が出たな。まぁ、年の功さ。お前は自分の生き方に疑問が浮かんでいる。それが今くるのは、早い方じゃやないか？　それにたどり着くヤツは少ないもんだ。気づかないか、ほとんどいないが生き方を確定しているかのどっちかだしな。実際、お前の親父もそうだったぞ。そこまで行くのにお前の数倍かかったがな」

響さんは大笑いしながら、帰っていった。その時はそんなことはないと、気にもしなかった。だが、しばらくすると、そのことが気になって、鍛錬に手が入らなくなる。だが、何が納得行っていないのかわからなかった。許嫁の二人を守りたいではいけないの

だろうか。ミネルバを救ったことが間違いなのだろうか。次第に考えない時間はなくなっていった。

「……どうしたの？　凱郎」

ミネルバは１３歳を過ぎていないが、特例として妖焔山の所属になっている。凱太郎と呼ぶのが面倒なのか、俺のことを凱郎とよんでいる。彼女の頭を撫でると、嬉しそうな顔をする。少なくともこの娘を救ったのは間違いではないことは確信した瞬間だった。

それのしばらく後にある二人組がきた。外見的には俺とほとんど変わらない。片方は背が低く子供という印象を受けるような銀髪の優しそうな少年で、もう片方はいかにもしっかりしているという感じの青年だった。その二人は父上に言われて、俺の悩みを解決しにきたと言った。その二人はかつて響さんが口にしていた、グランと日向雅という人物だった。二人は答える気がないのがわかると、襲いかかってきた。その顔に一切の迷いはなく、まっすぐだった。すぐに彼らが生き方を確定したものたちなのだと感じた。自分もこうなれたらと思った。その時にミネルバが俺を助けに来た。俺は助けなどいらないのに。

「……俺に攻撃をしないのか？」

ミネルバが来て動けなくなり、考えにふけっていた俺に一切の攻撃をしなかった日向

雅と名乗った男に尋ねる。
「俺は戦いにきたんじゃない。お前の悩みを解決しにきたんだ。話さなくても自分で解決してくれるならそれでいいからな」
「聞かせてくれ。お前たちがまっすぐに生きることができる理由を。俺はどう生きたらいい？」
　相手は目を空に向けて、感慨深そうに言った。
「お前が悩んでんのは生き方か。これぱっかりは俺たちが押し付けるわけにはいかない。が、話せることはないしてやる。俺は肉親がいない。殺されたからな」
　あっさりといい放つ。ミネルバとグランという男が戦っているのを後ろに聞きながら話を聞いた。
「生き方が決まっていると言っても、これは決めちゃいけない生き方だ。殺しも全て目的のためなら正当化するっていうな。復讐とは言えて言えないようなものだ。ただ、見つけたらそいつを殺すぐらいにしか考えてない。考えるのが得意なグランにも完璧なものは出せていない。だが、芯さえ決めれば、勝手に生き方は決まる。お前に芯がないわけない。あと外れた軸を治すだけだろうさ」
　軸のずれ？　わからない。いったい何がずれている？
「ずれているのもお前にとってまっすぐならまっすぐなんだろう。結局は自分のサジ次

第さ。
　頭を抱えてしまう。わからん、わからん!!　むしろ正しいものはないのか!?　……ん？　正しいものがない？　存在……しない……
「さっき来たあのミネルバ、だったか？　あいつを守りたいならば守ればいい。守られたいなら守られればいい。そんなもんに答えなんざありゃない。お前が納得さえすればいい。心からな」
　……俺が心からしたいこと。それはまちがいなく、梅と凛とミネルバを守りたい。それ以外に何がある?俺がそれ以外でしたいこと。思ったことは？　感じたことは？
彼ら二人なら？　……。
「もう一度手合わせ願いたい」
「いいだろう。それで答えが出せるならな」
「いや、お前だけではなく、あっちのグランという男も同時に頼む」

◯

妖焔山最頂部。そこには四文字が会議をするための場所でもある。今この場にいな

いのはここにいない五文字の男とそれの御付きをしている四文字の少年だけだった。
「つー訳で、とっとと始めようか。日向雅とグランの三文字昇格に反対なのは？」
手を挙げたのは前回と変わらない五人。この時点で過半数はない、はずだった。
「んじゃ、賛成が六人で賛成が勝ちだな」
今日があっさりと言い放ったものだから、思わず反対派のぬらりひょんが立ち上がって、文句を言う。
「おいおい、さすがにそれはないだろう。お前さんの票はまず入ってない。かと言ってここにいない軌響に投票権はねぇ。どうやって六票はいるんだぁ、響よぉ」
「なに、お前らが四文字がもう一人いるのを忘れてないか？　なぁ、髑髏？」
「カカカカッ、まったくだぜ」
ふすまを開けて入ってきたのは、2メートルの人骨が鎧を着ている姿だった。
「なっ!?　『無命死屍』だと、てめぇ、死んだはずだろ!?」
ぬらりひょんを含む他のメンバーが驚いていると、一人だけ、その正体に気づくものがいた。
「あなたは『反骨』骸ですね？」
「ケケケケッ、正解だ。さすがは響さんの一番刀だぜ」
骨が黒い妖気の塊をまとい、人型になる。すると、それは無梢戯　骸だった。

「お前らの言いたいことはわかるが、こいつは正真正銘の『無命死屍』だ。？いつわりもない。なら確かめてみろ」
　ラグナシアが前に出る。
「では、遠慮なく。あなたと初めて会った時、私があなたになんと言いましたか？」
「無駄に巨大な骨ですね、だ」
「私があなたをがしゃどくろとよんだのは何時でしたか？」
「おれが妖焔山の試験を受ける時、だったはずだぜ」
「あなたの四文字試験の内容の中で響さんに行った一言は？」
「ひどくキッツイ内容だったわ、殺す気かぁ！　だった……はず」
　ラグナシアは一つため息をつくと、結果を答えた。
「声音、記憶、彼の性格からしての言い方。全て一致します。やけに似ていたので、疑ってはいましたが、本当に本人だったとは」
　ラグナシア自身は響自身には甘いが、それ以外に関してはものすごく厳しい。もちろん評価をいじるような人物ではないし、今日もそんなことはしない。
「これなら俺も一票入れられるだろう？」
「……けっ、生死に関して触れやんかったわしらの責任てことになるんやろ。オチはわかっとるわ。認めるっちゅうねん」

ぬらりひょんがお手上げといった様子で両手を上げる。他のメンバーも同様だ。

「話が早くて助かるぜ。へへへっ、これでようやくあいつらを起爆剤として扱えるぜ。最初はサーゼクスあたりを巻き込むか」

第一章　旧校舎のディアボロス

風紀委員会と変態三人組

「では、風紀委員会会長から新入生に一言あります！　どうぞ」

　晴天となった空にわずかに雲が浮かんでいる。学校内に何本か植えられている桜の花びらが散り落ちて、桜色の道を作っている。ここは駒王学園、今は入学式の真っ只中だ。今は学園の代表者たちが挨拶している場面である。校長、教頭、そして生徒会長と続き、最後の風紀委員会会長が挨拶をしようとしている。

「新入生の皆さん。私は風紀委員会会長の二年生、杵槌日向雅と言います。私は生徒会長と違い、三年生ではありません。ですがだからといって、手を抜くなんてことはいたしません」

　机の上のマイクに向かって話す。体育館に響き、緊張感を醸し出す。

「先輩である三年生の皆さん、後輩である一年生の皆さん。私は風紀委員会会長として貪欲に動きます。間違えたこともするでしょう、腹が立つような真似もするでしょう、馬鹿なこともするでしょう。しかし、風紀委員会は間違えたことは行わないとして行動します。抵抗は認めません」

暴論を吐いたことにわずかに騒めく生徒たち。

「しかしッ!! 異論は認めます! 言葉でそれを語ってください! 全てを暴力で解決などしません! 私たちに求められている人物というのを考え、それを皆で高め合っていきましょう! 以上、風紀委員会会長 杵槌 日向雅でした」

ピッシリと教科書に書いたような礼をして、ステージを降りていく。そして、少しづつ拍手が起こり、最終的には数十秒拍手が続く。

◯

駒王学園には生徒会室が本校舎の3階にあり、風紀委員会室が2階にある。それぞれの部屋に大きな違いはなく、そこに務める生徒の置くものなどによって変わる。風紀委員会室の場合、そこまで変わっていないが、強いて言うなら、和風になっている。皿やコップなどは陶器が使われていた。今そこにいるのは、入り口に対するように存在する一番大きな机に面している豪華な椅子に座っている黒髪の少年、杵槌 日向雅。その隣で幾つかのプリントを持つ、桃色の髪を腰あたりまで伸ばし、耳の上に髪の毛をまとめるためのシニョンキャップを付けている、まさにできる女と言わんばかりの雰囲気があ

る茨木　夏箋。
「日向雅、今日は服装確認に問題があるものは5名。全員、注意完了したわ」
「服装注意者は減ってきたな。いいことだ」
「私たちに対する不満は少ないわ。あるとすれば大方一つよ」
「元浜、松田、兵藤の問題児か。何回注意しても、罰を課しても、やめる気配がない。むしろ、ある意味尊敬できるぞ」
　二年生の変態三人組で今や町でさえその名前を知る人は多い。毎度のごとく、風紀委員たちによる注意をしているのだが、一向に辞める気配がない。何度か罰則を行わせたりしたのだが、効き目がなかった。
「その問題児の一人が厄介ごとに巻き込まれたっぽいぜ」
　風紀委員会室の扉を開けて現れたのは、五人いる風紀委員のうち唯一、問題児三人組と同じクラスの矢武颯也だった。
「と、いうと？」
「堕天使の一人と接触していた上に、悪魔になってやがった。あいつから神器の気配がしてたし、殺されたのをおそらくグレモリーが転生させたんじゃないのか？　あと、堕天使彼女のことについては知らないふりをしておいたぜ」
　会長席の前にある、ソファに乱暴に座り込んで日向雅を見る。指示を待っている様子

だ。

「俺たちは依頼をこなす。ただそれだけだ。今の依頼は覚えているな？」

「問題行動を起こした異種族をしょっ引くんだろ？　なんでまた響さんはこんな依頼を俺たちにしたのかねぇ。『学校に通ってこい。ついでになんかしてるやつはしめちまえ』ってさ」

そう、日向雅を含めた夏箋、凱太郎、骸、颯也は響の指示で去年からこの駒王学園に入学した。響自身は満面の笑みだったので、全員が何かあるとは思っているのだが。ただ、グランのみはそれを辞退した。それは彼の境遇もあるのだが、彼の学力は高校の内容などすべて頭に入っているし、本人が自由に動ける人材がいた方がいいと提案したことで、入学はグランのみがしなかった。

「向こうが何もしない、なんて訳ないわよ。グランによれば、近々聖女って呼ばれてた子がくるみたいよ。その堕天使の住処にね」

「一悶着ありそうだぜ」

だるそうに目を細めて天井を見上げる颯也を横目に日向雅はたちあがり、一冊のファイルを持って外に出ようとする。

「どこへ？」

「先生への報告書の提出だ。やることはやったから、先に帰っていいぞ」

風紀委員会室から、教員室までは結構距離がある。階段を上がり、そのフロアの端から端へ移動する程度ではあるのだが、今日が金曜日であることも合わさって、少しだるかった。

「鈍ってきたか……？」

肩を回しながら、前に歩く。鍛錬は怠っていないはずだ。

「あなたがその程度で鈍っていしまったら、私たちはお手上げですよ」

凛とした声。曲がり角から現れたのは、眼鏡をかけた黒髪の女生徒。駒王学園生徒会長の支取蒼奈だった。

「ソーナか。まだいたのか？」

「生徒会長なので仕方ありませんよ。まぁ、風紀委員会があってくれてだいぶ助かっていますが」

他愛のない会話をすると、

「おい、杵槌！　お前、二年生なのに先輩である会長を呼び捨てすんなよ！」

そういって現れたのは男子生徒。茶髪で背が高く、活発そうなイメージだった。名前は確か、

「匙元士郎、だったか。新しく生徒会に入ったと来たな」

「そうだ！　っつーか、話聞いてんの……」
「やめなさい、匙」
「でも、会長⁉」
「私から呼んでもらえるように頼んだんです。彼に悪いところなんてありませんよ」
「んなっ……」
　どうやら彼は俺がソーナと仲がいいことが許せないのか、敵対しているような目を向ける。だが、いくつもの場数を踏んだ俺からすれば、子供の癇癪しか見えなかった。
「まぁいい。がんばれよ、匙とやら。ソーナは厳しいからな」
「あなたほどではありませんよ」
　手を挙げて挨拶をしながら、職員室に向かう。実力が相当に上がっていたし、向こうの場で会うのが楽しみだ。

○

　あたりはすっかりと暗くなり、月明かりと街灯が路地を照らす。街灯が一瞬暗くなったかと思うと、そこには六人の男女がいた。全員が制服を着こんだ学生だが、雰囲気が

普通とは違った。
「それで、部長。はぐれ悪魔っていう悪魔を裏切ったやつを倒しに行くんですよね？」
「そうよ、イッセー。さっき説明したでしょ」
「いや～、なんていうか、場所がこんなに近いとは思ってなくて……」
いま、彼らがいるのは町の端にあるような廃工場の前である。彼の想像ではもっと違う場所が浮かんでいたのだろう。
「あはは、イッセーくんはファンタジー的な場所を想像してたのかい？」
「うっせ、悪いかよ、木場」
肩近くまで金髪を伸ばしていて、右手に剣を握っている少年、木場祐斗にからかわれ、顔を真っ赤にする。
「あらあら、いましたわよ、リアス」
黒髪の女性は一瞬で巫女服に着替え、手に電流を走らせる。入口から中を見ると、中にいるのは人のサイズを明らかに超えた怪物だった。だが、様子がおかしい。
「……こぉのわ、わたしがぁ……こんな小僧にぃ……！」
全身が血だらけになった上の一部が女性、下がムカデのような怪物は地面に横たわる。
「抵抗はお勧めしないって、何度も忠告したと思うんですけど……」

その怪物の上にいたのは銀髪の髪を腰まで伸ばした、赤い目をした青年と少年のちょうど中間的な性別のイメージを持った男だった。彼はこちらに気づくと、飛び降りて一礼をする。
「これはこれは、リアス・グレモリー殿。この町の管理者様」
「……あなたは誰なのかしら」
「はじめまして、私は妖焔山に所属する妖怪の一人、『紅血鬼』の文字を与えられているものです」
妖焔山の文字所持者、それも三文字だったことに驚きを隠せないリアスたち。
「な、なぁ。妖焔山ってなんだ?」
数日前に悪魔になったばかりの一誠だけは状況を理解できていなかった。
「簡単に表すなら、あらゆる勢力に対しての傭兵団みたいなものです。そのなかでも優れた人には二つ名として漢字が与えられるんです。その中でも三文字というのは一般の依頼を受ける中ではトップクラスの実力を持つんです。私たち個人では勝負になりません」
「いぃ!? まじなのかよ、小猫ちゃん!?」
白髪の女の子の説明を聞いて驚きに表情を隠せない。そんな様子を見て、『紅血鬼』はくすくすと笑った。

「私たちは依頼をされてここにいます。あなた方の迷惑になるようなことはありませんので、どうかご安心を」
「その依頼は誰からされて、どんな内容なのか。私たちも知る権利があるのではなくて？」
悩むようなそぶりを見せた後、懐から一枚の紙を取り出す。それをわかりやすいように両手で伸ばして、見せた。
「ここで依頼を受けたという証明書です。これがあれば、あなたたち悪魔でも文句は言えないと思いますよ？　依頼に関しては個人情報に近いので、お話はできませんのでご了承をば」
この行為に関して、リアスは黙らざるを得なかった。その契約書にあった印は確かに悪魔のものだったからだ。そして、彼は一例をした後、蝙蝠状の翼をはやして、飛んでいった。
「今回は仕方ないわね。このことはお兄様に報告しておきましょう。みんな帰るわよ」
「了解です、部長！」
一誠が元気な声を上げる。それに続き、祐斗、朱乃は外に出るが、小猫だけがその場に残り、『紅血鬼』が飛び去った後を見上げている。
「小猫？」

「…………なんでもありません」
リアスが言葉をかけると、何も変わらない様子で外に出てきた。何もないだろうと、彼女は魔方陣を起動させる。
「あの、飛び方。まさか……」
その声は魔方陣で移動する音に消えた。

○

翌日、搭城小猫は昨夜見た、男の飛び方を忘れられなかった。普通に飛んでいると誰もが思うはずなのに、その姿がかって見た仮面の人物の飛び方に重なったように見えた。だが、『紅血鬼』と呼ばれた男と仮面をつけた人物とでは身長や声も違う。共通点は男であるであろうことと飛び方、そして血という単語だった。これは偶然なのかと、考えにふけっていたその時だった。
「おうおう、マスコットキャラたるあんたがそんな顔して考え事してちゃ、変な噂ばらまかれるぞ？　げげげげげ」
後ろから聞こえる、声の低い笑い声。このクラスになってから、係りや席などでやけに関わり合いがあった男のものだった。

「……今考え事してるんです。話しかけないでください、骸くん」
「おお、怖い怖い。触らぬ神に祟りなしってな。かかかかっ」
まだ昼食の時間でもないのに、パンの袋を開けてかぶりつく。このクラスの中でも病弱そうに見える外見と体格をしているくせに、やけに丈夫なこの男はやけに私に絡んでくる。ふんいきからただ、からかっているだけだとわかった時から放っておいたが、今は気分が悪かった。
「……今日は午前中の授業だけなのに、なんで昼食持ってきてるんですか？」
「ん？　腹が減っては戦はできぬっていうだろ？」
変な論理を聞いて、考える気をなくしてしまった。次の授業が終わったら、さっさと部室に行こうと思った。
「…………動くのは明日か？　だとしたら昼飯いらなかったか。しゃーねー、残りは明日にとっとくか」
最後に発したその言葉が少し気になったが、放っておくことにした。

○

「たっだいま〜。いわれたもんかって来たぞ」

「うむ、お帰りだ」
　古びた一軒家。そこで八畳ほどのリビングの真ん中でぐつぐつと煮える鍋があった。そのテーブルの一角に座っているのが凱太郎だった。
「肉がないってどうゆうことなんだよ」
「悪いか。家にあると思って買ってこなかったんだよ」
　颯也が切られた野菜が入ったバットを両手に抱えて持ってきた。
「まず、骸が結構肉を食べるのに疑問を抱いてるわよ、私は」
　コップとお茶を両手に持ちながら現れた夏箋が机の周りにそれぞれのコップを置く。
「いいじゃねえか。骨でも腹は減るんだよ」
「食っても腹にたまらないんじゃないのかよ」
　颯也が骸の買ってきた肉と野菜を煮え切っただしの中に放り込む。菜箸で中を混ぜながら、残り二人の到着を待つ。
「悪い、遅れた」
「結構時間食っちゃった」
　十分ぐらいたつと、日向雅とグランが到着した。
「遅いぞ～。腹減ったぜ～」
「骸はさっきからそればかりだな。骨なのにな」

「うっせーよー」
　全員が席に座り、鍋をつつき始める。普段から晩は全員で食べるようにしている。そっちのほうが食費が浮くからではない。断じてない。
「それでさ、地中にいる俺の一部からの連絡としては、明日には動きそうだぜぇ」
「僕の血たちも少なくとも明日までには動くって判断してる」
　日向雅は肉と白菜をほおばり、咀嚼し飲み込んだ後、箸をおく。
「明日は全員すぐに動けるようにしておけ。幸いにも授業は午前中に終わる。監視は二人とも続けろ。相手が動いたら、グランは先に動け」
「「「了解」」」
　全員が指示を聞き、納得をした。グランが今日の街の様子を報告していると、日向雅はグランに尋ねた。
「グレモリーに接触したそうだな」
「はぐれがちょうど人を襲ってて、助けない選択肢はなかったんだ。派手なことはしないつもりだったんだけど……」
「それに関してはいい。塔城小猫ばれなかったか？」
「うん、体は変えてる。でも、いくつか共通点があるし、ばれるかばれないかは時間の問題」

考えるそぶりを見せる日向雅とグラン。二人で響に報告するということで納得した。

「お前はグレモリーの眷属の一人に目的があるんだからな。それは理解しておけよ」

「もちろん。僕がそれを一番わかってる」

静かに夜が更けてゆく。彼らの物語が動き出す、その瞬間だった。

顔見せ

昼時が過ぎ、日が落ちて、山に重なり始めたころ。今、駒王学園は学校側の都合で、昼までしか授業がない。その分だけ部活に熱中する人物は多く、特に運動部の熱気もすごい。そんな様子を屋上から見下ろしている男が三人。
「ふむ、俺も部活というのをやってみたいものだ」
「助っ人として何回かやってんだろ」
フェンス越しに運動場を見ながらつぶやくがたいのいい男に対し、突っ込みを入れながら昼飯として作ってきた弁当をかきこむ。今はもう昼食を食べるのには遅いが、風紀委員としての仕事をしていたため、遅くなってしまったのだ。
「んで、どうよ、骸？　動いたか？」
「いんや、何かを用意してる途中ってところだな。完成までもうちょいだろ」
「それ動いてるって言わないか？」
「まだ、作戦を実行してないんだぜ。それに介入はできないじゃねえか」
実際問題、平等を謳う妖焔山に『何も悪事を働いていないのにその行動を妨害する』という行為を文字持ちがするわけにはいかない。それはルールでもあるが、彼らのプライ

ドとしてもある。たとえ、悪事を実行する寸前であっても、決定的な証拠があるに越したことはない。
「こんな時に限って、グランと日向雅、その上夏箋までほかの任務が来るなんてなぁ。意図的に響さんが送ってきたとしか思えないぜ」
「いやいや、颯也。いくらあの人でもそれは……あるのか?」
「ないわけないよな～。まず、あの人ができないっていうほうが探すの難しいだろ。ていうか、想像できねえ」
　三人が笑いあっていると、骸が顔色を変える。
「どうした?」
「教会の地下で動きが収まった。逆に魔力が増えてきた。そろそろおっぱじめるみたいだぞ。お、ついでに三人追加だ。グレモリー眷属だぜ」
　三人は立ち上がり、山の上の境界を見据える。もう夜になりそうなほど、太陽は沈み始めていた。

○

「なんで、あたしが見張りなんか～」

金髪ゴスロリの堕天使の彼女は木の上で足をぶらぶらさせていた。すると、近くの地面に赤い光とともに魔方陣が描かれる。そこから現れた二人の悪魔に反応し、彼女は木から降りる。
「これはこれは。わたくし、人呼んで堕天使ミッテルトと申します」
「あらあら、ご丁寧に。うふふ」
紅髪、そして黒髪の二人に対し、形だけの礼を行う。彼女にとって、敵対する悪魔の中で危険な二人を呼び込めただけでも、うれしい結果だ。
「さぁ、いでよっ、カラワーナ！　ドナーシーク！」
一気に仕留めてしまおうと、仲間たちを呼ぼうとした彼女ではあったが。十秒近くたっても現れる気配がない。
「あ、あれ？」
「あなた、仲間が近くにいないのかしら？」
「そ、そんなはずはないはずっす！　あいつら、どこに行って……」
周りを見渡した、その時だった。
「お仲間をお探しか～い？　げっげっげ」
声が低い男の声。それがいきなり地面の下から響き渡る。地響きが起き始め、地面の二か所に巨大なひびが入り始め、二本の白い線が走る。

「これは、人骨!?」
　出てきたのは文字通りの白骨化した巨大な腕の骨だった。そのサイズは普通の人間のサイズの数倍はある。しかも、その片方の腕には一人の女堕天使が握られていた。
「か、カラワーナ!?　何してんすか?」
「す、すまん。この謎の骨につかまってしまった」
　その骨はやけに響く笑い声とともに、腕の骨を揺らす。
「初めまして、と一応言っておこうかぁ。俺は妖焔山が一人『反骨』なり。任務のためにここまでやってきた、ってな」
（また、妖焔山……）
　リアス自身、『紅血鬼』に会った後、魔王である兄に事情を詳しく聞いた。なんでも、ある依頼で文字持ちを六人もこの町へ派遣しているというのだ。その上、全員が二文字持ちを超えているときた。依頼などと言いながら、自分のために派遣したと思っているリアス自身は、さすがに過保護が過ぎると思った。
「ここを治めるグレモリー様の目の前で誠に申し訳ないんだが、堕天使の諸君に提案だぁ」
　その手に持っている堕天使を目の前に差し出すようにしながら、高らかに叫ぶ。
「なに、簡単なことさぁ。お前ら全員投降して妖焔山に来ないか?　いいぜぇ、あそこ

は。階級とか気にせず暮らせる。響さんは間違いなく、お前らみたいな反乱分子を嬉々として受け入れるぜぇ」
「それを断ったら……、どうなるっすか」
「もちろん、皆殺しに決まってんだろ？　俺たちは慈愛に満ちた神じゃねえ。敵なら終わらせるだけさ」
　あまりにあっさりと。そのうえ、明らかにカラワーナの顔がゆがむ。『反骨』が腕に力を入れているのだ。
「や、やれ、ミッテルト！　私にかまうな!!」
「で、でもっ」
「おうおう、いい展開だねえ。さてどうす、んぐあっ!?」
　堕天使二人の討論をしているとき、その腕骨に特大の光の槍が貫き、爆発が起こる。その天空には一人の影があった。
「よくやった、カラワーナ、ミッテルト。これでその腕は動けまい」
「何やってんすか!!　カラワーナを殺す気なんすか!?」
「役に立たんのならおとりにはなってくれんとな」
　悪魔の二人は介入することをしなかった。本来なら、優先されるのはリアスたちのはずだ。だが、彼らには三文字持ちが含まれている。三文字は並の家の次期当主よりも実

力が高いと言われているため、うかつに手を出せない。お前らの「それはできない相談だなぁ」なにっ……ぐはっぁ!?」
「くくっ、次はお主らよ。グレモリーとその女王よ。お前らの「それはできない相談だなぁ」なにっ……ぐはっぁ!?」

光の槍を両手に加えて、とびかかってきたドナーシークを身長が百九十はありそうな巨躯の男が光の槍を受け止めながら、男を殴り飛ばす。男は赤い鬼の仮面をつけた上半身裸だった。でも、筋骨は隆々で、ある意味、彫刻のようにしっかりとした形をしていた。
「うむ、まぁまぁな威力ではあるが、これでは鍛えた鬼の皮膚を超えることはできん」
「きぃさまぁっ!!」

顔面を変形させながら、まだあきらめず、光の槍を振りかざしながら巨大な男に突っ込む。
「たぁくよ、痛いことしてくれる」
「んぐあぁっ!?」

しかし、その男を巨大な骨の手が押しつぶす。
「いや、お前は痛くないだろう?」
「まぁなぁ。違和感はあるものの、俺はあらゆる生物の骨だから、光の一撃もあまりきかないのさ」

押しつぶして伸びてしまった堕天使の男を骨の手がつまみ上げる。
「伸びちまってるし、連れてくか。あっ、そうだ。ミッテルト、だっけ。お前は？」
ビクッと震えながら彼女は下を向く。ぽつぽつと二つの水しずくが地面に落ちる。
「い、いくぅっす!!　死にたくはないっすぅ!!」
「くはは、ごもっとも!!　んじゃ、先に行くぞ。『力砕』、後は頼むぜぇ」
両腕の骨はミッテルトごと地面に沈んでいく。『力砕』と呼ばれた男はそれを横目に、悪魔二人を見据える。
「先ほども名を知らせてもらったと思うが、妖焔山の一人『力砕』なり。君らがここにいてくれてもいいのなら俺は何もしない。いやなに、こちらにも事情があってな。構いはしないだろう？」

○

駒王庁のはずれに存在する教会。そこに飛び込んだ悪魔を迎える悪魔祓いが一人。
「ご対面！　再開だねぇぇ！　感動的だねぇ！」
「フリード！」
二度目の対面となるフリードと一誠。寂れて荒れた場所での戦闘が始まった。三対

一であるが、互角に戦っているフリードの実力は疑いようがない。
「まったく、むかつく悪魔さんたちだよね、ちみたち〜。さっさとやられてくれないかな〜」
「あいにくだけど、いやだよっ！　イッセーくん、君は奥へ！」
「お、おう！」
　木場がフリードを抑えている瞬間に、奥に行かせようとするが、
「そんなことさせると思ってんですかぁ!?」
　剣を構えている方と逆の手で持つ銃で、イッセーを狙う。小猫自体は物を投げたあとの体制のため、何もできない。一誠自体も避けようとしているが、間に合いそうにない。
「まったく、アシストすんのも大変だな」
　教会の上、正確には天井裏に張り付く影が一つ。その下では、今まさに戦闘が始まった瞬間であり、かけられた声に反応し、上を見上げる元聖職者一人、悪魔三人。
「別に続けてもらってもいいが、俺がその聖者もどき相手にしてやってもいいぜ。悪魔のお三方」
　降りてきた人物は、前腕部分に大きな鎌のような刃を付けた人物であった。獣を模した仮面がつけられており、表情は見えない。白装束のようにほぼ全体が真っ白な着物のようだが、現代のジーンズのような機能性を併せる持ったような不思議な服を着てい

た。
「なんだよてめぇ、僕ちんと殺りあおうってかぁ？　なめてもらっちゃ困るんすよ～。君みたいな雑魚に僕ちんが倒せるとでも？」
　フリードは体をそらせて大笑い。それに合わせたのか、その男も少し笑いながら、
「俺は妖焔山が一人、『鎌風』。まぁ、なんだ。お前がお尋ね者の以上、無視するわけにはいかなくてな」
　と宣告した。フリードの顔から表情が消える。出てくると思っていなかったわけではない。だが、せいぜい一文字ぐらいだと考えていた故に警戒心を強めた。
「ほら、行きなよ。救いたいやつがいるんだろ？」
「お、おう！　ありがとよ！」
　一誠が像のもとへ走り出し、
「行かせると思ってんすか～!?」
　フリードが銃を向け、
「行かせろよ」
『鎌風』がその銃を切り刻む。光を放つその銃は銃身がなくなったことにより、ため込まれた聖なる光が暴発し、爆発した。
「あんさん、妖怪のくせになんてことしやがりますかぁ～？　僕ちんの大事な銃が粉々

じゃないすか」

「また買いなおせよ。買える品物じゃねえけどな」

お互い獲物を構えなおす。しかし、フリードはすぐにそれを下した。

「もうくそ悪魔さんたちも行っちゃいましたし、わざわざあんたと事を構えなくていいわけだし、にげます。ばいちゃ！」

閃光を放ち、一瞬で消える。『鎌風』も構えを解き、ケータイを開く。

「おう、『反骨』か？　こっちは終わった。あとはあいつらに任せよう。一誠なら聖女様を救ってくれるだろうさ」

○

「結局、おいしいところは持ってかれちまった感じだな、げげげげ」

「もともと俺たちのほうが介入している。普通であろう。それにちょうど日向雅もグランもいない。これが一番良い判断だ」

駒王町から離れたところにある、そこまで大きくない山の上。『反骨』こと無梢戯　骸と『力砕』こと新庄　凱太郎はもうひとり、『鎌風』こと矢武　颯也を待っていた。
「はぁ、割に合わないぜ。俺はあの赤髪姫怖かったしなぁ」
「お主が怖がる理由が見当たらん。嬉々として響さんとつるんでいるお主が、実力が少々高いだけの女にな」
そのコメントにげげげといつも通りに笑う。
「それにはすごく同意だ」
「お、颯也。おかえり。どうだった？」
「一誠は赤龍帝の籠手（ブーステッドギア）を目覚めさせた。これも響さんのたくらみだってほぼ確定だな。うまくいきすぎだぜ」
「まったくだ」
「げげげ」